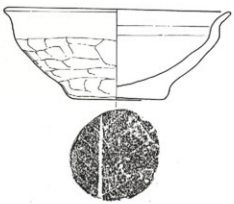
茨城県行方市

上ノ塙遺跡

発掘調査報告書



平成24年3月

行方市
行方市教育委員会
有限会社　日考研茨城

茨城県行方市

上ノ塙遺跡

発掘調査報告書

平成24年3月

行　　方　　市
行方市教育委員会
有限会社　日考研茨城

序

行方市は，茨城県の東南部にあり，平成17年９月２日に麻生町・北浦町・玉造町が合併して誕生しました。人口約３万８千人，面積約166.33㎢となります。

北は鉾田市と小美玉市，南は潮来市に隣接し，東は北浦，西は霞ヶ浦(西浦)に面しています。

地形的には東西の湖岸部分は低地，内陸部は標高30m前後の丘陵台地(行方台地)により形成されています。霞ヶ浦沿岸部は概ねなだらかで連続的な稜線であるのに対し，北浦側は比較的起伏に富んでいます。

気候は比較的温暖で，豊かな自然環境に恵まれ，古くより人々の生活の場となり，幾多の歴史が残されております。現在でも，その人々の痕跡として，貝塚や古墳，城館跡などの遺跡が市内に数多く点在しています。

市では，これらの埋蔵文化財を保護し，後世に継承することの重要性を踏まえ，その対応に努力しているところでありますが，近年の産業構造や生活様式の多様化に伴う開発が増加する中で，遺跡の保護・保存は非常に困難となってきています。

この度，行方市杉平字上ノ壕60番地１周辺で市道(麻)2229号線の拡幅改良工事が計画されました。計画地内には，周知の遺跡である上ノ壕遺跡が所在しており，現状維持保存が困難であることから，やむを得ず発掘調査による記録保存をすることとなりました。

今回の調査の結果，縄文時代，弥生時代，古墳時代後期，奈良・平安時代の複合遺跡で台地上にある拠点的集落跡が確認でき，さらには縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，鉄製品が出土するなど大きな成果が得られ，本報告書にまとめ上げられましたこと厚く感謝申し上げます。

本報告書作成に際し，発掘調査並びに報告書の執筆を担当いただきました関係調査員の方々には心より敬意を表し，この報告書が郷土をより深く知るうえで，広く一般の方々にも活用いただければ幸いに存じます。

最後に，ご指導賜りました茨城県教育庁文化課，鹿行教育事務所はじめ，地元関係各位の深いご理解とご協力に感謝の意を表すとともに，調査に携わっていただいた方々に心から御礼申し上げます。

平成24年３月

茨城県行方市教育委員会
教育長　根本安定

例　言

1．本書は、行方市の委託を受けて、行方市教育委員会の指導のもと、有限会社日考研茨城が行った、道路建設に伴う記録保存調査を目的とした発掘調査報告書である。

2．本書は、下記の遺跡を収録したものである。

遺跡名　上ノ塙(かみのはなわ)遺跡
所在地　茨城県行方市杉平字上ノ塙82 外
調査面積　680㎡

3．掘調査の現地調査及び整理調査は、下記の期間に実施した。

調査期間　平成22年２月８日～平成22年２月23日
　　平成22年３月11日～平成22年３月31日
第２次調査　平成22年５月17日～平成22年７月14日
整理期間　平成23年11月１日～平成24年３月15日

4．発掘調査組織は下記の通りである。

調査担当　大渕　淳志[(有)日考研茨城]　現地・整理
調査員　遠藤　啓子[(有)日考研茨城]　現地・整理
現地調査作業員　小野豊、佐賀実、露久保三郎、友部政夫、谷中昌
整理調査員　大渕由紀子・大野美佳[以上(有)日考研茨城]
事務局　(有) 日考研茨城
調査指導　行方市教育委員会生涯学習課

5．本書に関わる編集は、小川和博(有)日考研茨城)が行った。

6．本書に関わる執筆は、小川和博、大渕淳志、遠藤啓子が行い、分担は文末に記載した。

7．本書では以下のような遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。

竪穴建物跡：ＳＩ　掘立柱建物跡：ＳＢ　土坑：ＳＫ　柱穴状遺構(ピット)：Ｐ
撹乱：Ｋ

8．本書中の色調に関する表現は新版標準土色帖(農林水産技術会議事務局監修2000年版)に従った。

9．本書で使用した図面の方位は、すべて座標北であり、標高は海抜高である。

10．本書に掲載した遺物のスクリーントーンについては、赤彩処理もしくは黒色処理が施されていることを示している。

11．遺構および遺物の写真撮影は大渕淳志・小川和博が行った。

12．調査の記録および出土遺物は、行方市教育委員会が保管している。

13．発掘調査および報告書の作成に当たり、以下の方々のご教示・ご高配を賜った。記して、深く謝意を表す次第です。(敬称略・順不同)
茨城県教育委員会、(財) 茨城県教育財団、ひたちなか市埋蔵文化財調査センター、
佐々木義則、鈴木正彦

本 文 目 次

序
例言
第１章　序章 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査経過とその概要 …… 1
　第３節　調査日誌 …… 3
　第４節　遺跡の位置と周辺遺跡 …… 5
　　１．遺跡の位置 …… 5
　　２．周辺の遺跡 …… 5
第２章　検出された遺構と遺物 …… 12
　第１節　概要 …… 12
　第２節　基本層序 …… 12
　第３節　調査区出土縄文時代・弥生時代の遺物 …… 12
　第４節　竪穴建物跡 …… 13
　第５節　掘立柱建物跡 …… 31
　第６節　土坑 …… 34
　第７節　柱穴状遺構 …… 39
第３章　まとめ …… 40

挿図目次

第1図　グリット配置図 …… 1
第2図　遺跡周辺地形図(1：2,500) …… 2
第3図　試掘調査トレンチ配置と遺構検出状況 …… 3
第4図　試掘調査トレンチ出土遺物 …… 3
第5図　遺跡の位置と周辺の遺跡(1：25,000) …… 6
第6図　遺構配置図(1) …… 10
第7図　遺構配置図(2) …… 11
第8図　基本層序 …… 12
第9図　調査区出土縄文時代・弥生時代の遺物 …… 13
第10図　竪穴建物跡SI01実測図 …… 14
第11図　竪穴建物跡SI02実測図 …… 15
第12図　竪穴建物跡SI02カマド実測図 …… 15
第13図　竪穴建物跡SI02出土遺物 …… 15
第14図　竪穴建物跡SI03実測図 …… 17
第15図　竪穴建物跡SI03カマド実測図 …… 17
第16図　竪穴建物跡SI03出土遺物 …… 17
第17図　竪穴建物跡SI04実測図 …… 18
第18図　竪穴建物跡SI04出土遺物 …… 18
第19図　竪穴建物跡SI05実測図 …… 19
第20図　竪穴建物跡SI05カマド実測図 …… 19
第21図　竪穴建物跡SI05出土遺物 …… 19
第22図　竪穴建物跡SI06実測図 …… 20
第23図　竪穴建物跡SI06カマド実測図 …… 20
第24図　竪穴建物跡SI06出土遺物 …… 21
第25図　竪穴建物跡SI07実測図 …… 22
第26図　竪穴建物跡SI07出土遺物 …… 22
第27図　竪穴建物跡SI08実測図 …… 23
第28図　竪穴建物跡SI08カマド実測図 …… 23
第29図　竪穴建物跡SI08出土遺物 …… 24
第30図　竪穴建物跡SI09実測図 …… 25
第31図　竪穴建物跡SI09カマド実測図 …… 25
第32図　竪穴建物跡SI09出土遺物 …… 26
第33図　竪穴建物跡SI10実測図 …… 27
第34図　竪穴建物跡SI10出土遺物 …… 27
第35図　竪穴建物跡SI11実測図 …… 28
第36図　竪穴建物跡SI11カマド実測図 …… 28
第37図　竪穴建物跡SI11出土遺物 …… 29
第38図　竪穴建物跡SI12実測図 …… 30
第39図　竪穴建物跡SI13実測図 …… 31
第40図　竪穴建物跡SI13カマド実測図 …… 31
第41図　竪穴建物跡SI13出土遺物 …… 31
第42図　竪穴建物跡SI14実測図 …… 32
第43図　竪穴建物跡SI14カマド実測図 …… 32
第44図　竪穴建物跡SI14出土遺物 …… 32
第45図　竪穴建物跡SI15実測図 …… 33
第46図　竪穴建物跡SI15出土遺物 …… 33
第47図　竪穴建物跡SI16実測図 …… 34
第48図　竪穴建物跡SI16カマド実測図 …… 34

第49図　竪穴建物跡SI16出土遺物 …… 34
第50図　竪穴建物跡SI17実測図 …… 35
第51図　竪穴建物跡SI17出土遺物 …… 35
第52図　掘立柱建物跡SB01実測図 …… 36
第53図　土坑SK01～08実測図、土坑SK07出土遺物 …… 37
第54図　柱穴状遺構実測図 …… 38

写真図版目次

PL.1　1．遺跡遠景(南から)、2．遺跡遠景(南から)、3．遺跡近景(西から)
PL.2　1．調査区(第1次)全景(東から)、2．調査区(第1次)全景(西から)、
3．調査区(第1次)全景(西から)、4．調査区(第1次)全景(北西から)
PL.3　1．調査区(第2次)近景(西から)、2．調査区(第2次)近景(北西から)、
3．調査区(第2次)全景(北西から)、4．調査区(第2次)全景(北西から)
PL.4　1．調査区(第2次)全景(西から)、2．調査区(第2次)全景(北西から)、
3．調査区(第2次)全景(西から)、4．調査区(第2次)全景(南西から)、
5．調査区(第2次)全景(南西から)
PL.5　1．SI01(西から)、2．SI02(南から)、3．SI02カマド(南から)、
4．SI03(第1次)(南から)、5．SI03(第2次)(南から)、6．SI04(東から)、
7．SI05・07(第1次)(西から)、8．SI05・07(第2次)(東から)
PL.6　1．SI06(南から)、2．SI06遺物出土状況(南から)、3．SI08(南から)、
4．SI08(南から)、5．SI08・09(南から)、6．SI10(南から)、7．SI11(南から)、
8．SI11カマド(南から)
PL.7　1．SI12(南東から)、2．SI13(南から)、3．SI13カマド(南から)、
4．SI14(北東から)、5．SI14遺物出土状況(南から)、6．SI14カマド(北東から)、
7．SI15(北西から)、8．SI15貯蔵穴(南西から)
PL.8　1．SI16(南東から)、2．SI16(北西から)、3．SI17(南西から)、
4．SI17遺物出土状況(北西から)、5．SB01(南から)、6．SK01(南から)、
7．SK02(北から)、8．SK04(南から)
PL.9　1．調査区出土縄文土器・弥生土器・石器、2．竪穴建物SI02、3．竪穴建物SI03、
4．竪穴建物SI04
PL.10　1．竪穴建物SI05、2．竪穴建物SI06
PL.11　1．竪穴建物SI08、2．竪穴建物SI09
PL.12　1．竪穴建物SI10、2．竪穴建物SI11
PL.13　1．竪穴建物SI13、2．竪穴建物SI14、3．竪穴建物SI15
PL.14　1．竪穴建物SI16、2．竪穴建物SI17

表目次

表1　上ノ塙遺跡と周辺遺跡一覧
表2　柱穴計測値
表3　柱穴計測値
表4　柱穴計測値
表5　柱穴計測値

第1章　序　　章

第１節　調査に至る経緯

平成21年1月、行方市建設課より行方市市道(麻)2229号線拡幅改良工事にかかる埋蔵文化財の照会があり、工事予定地内には周知の遺跡である上ノ境遺跡が所在することから、工事予定地にかかる遺跡の範囲を確認するため、まず平成21年3月11日～12日に第一次試掘調査として９本のトレンチを設定し確認調査を行った。その後工事の進捗状況に合わせ、また周辺住民の交通に支障を来さぬよう配慮しながら、平成22年６月25日に第二次試掘調査として、工事予定地西側南西隅から北東に伸びる市道沿いに２本のトレンチを設定し確認調査を行った。調査の結果、工事予定地内ほぼ全域で遺構が確認された。

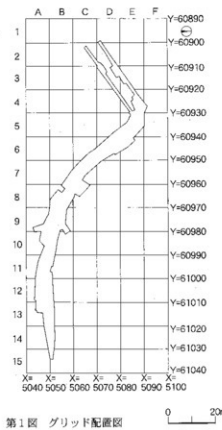
その後、埋蔵文化財の取扱について行方市建設課と協議を進め、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、(有)吉研茨城に委託し、平成22年１月20日～７月15日の予定で発掘調査の実施に至った。

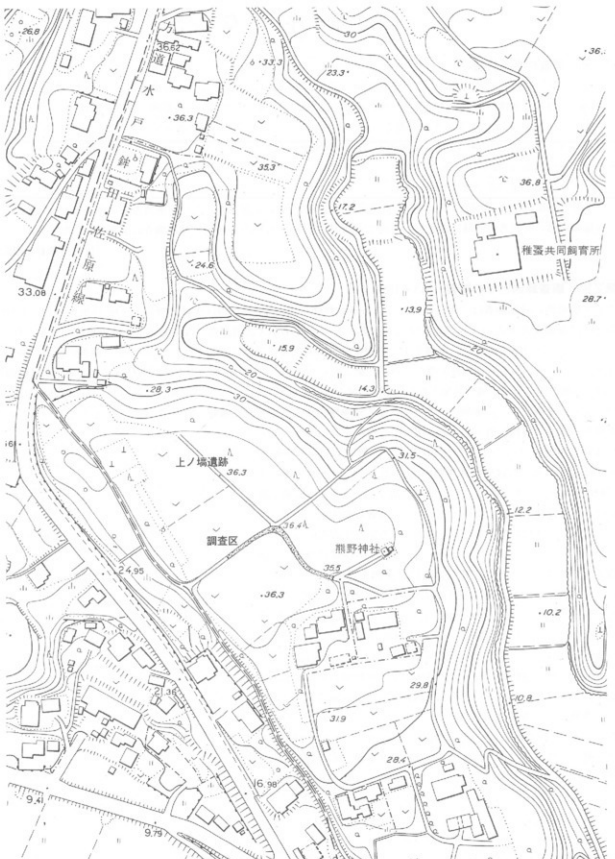
(行方市教育委員会)

第２節　調査経過とその概要（第3・4図）

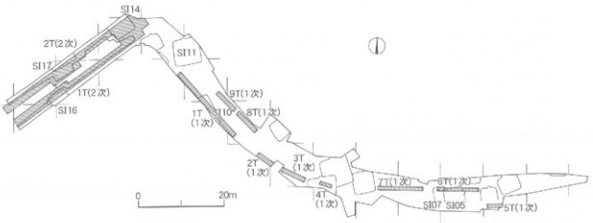
上ノ境遺跡の試掘調査は、現行使用している道路敷地に当たるために第1次試掘調査を平成21年３月11・12日、第２次試掘調査を平成22年６月25日の二回実施している。第１次試掘調査では開発予定区域の東側が対象となり、ここにトレンチ９本を設定し、重機を用いて関東ローム層上面を目標に掘削を行った(第３図)。調査の結果、第１・６・７トレンチから竪穴建物跡の落ち込みが、第２トレンチから土坑の落ち込みが確認された。また第２次試掘調査では、西側の開発予定区域が対象となり、開発区域のほぼ半分以上がカバーできる幅広く長いトレンチを２本設定し、同じように重機によって掘削し、ここから竪穴建物跡の落ち込み３軒が確認された(第３図)。しかもこれら落ち込み上層から多くの遺物が出土し、第４図に主な遺物を図示した。１・２は竪穴建物跡SI11の出土で、土師器・坏と甕である。６世紀後半に比定される。３は竪穴建物跡SI03の出土で、須恵器・蓋。８世紀前葉に比定される。これらの成果に基づき、開発予定区域全面680㎡が調査対象区域となった。しかし、調査対象区域の一部が現在市道として使用しているため、調査区域を第１次調査区分として２分し、また第２次調査区も２分して、全体で４区域に分割して調査を進めることとなった。第１調査区は東側を対象とし、平成22年２月８日から同年２月23日まで実施し、竪穴建物跡７軒(SI01～07)、土坑４基(SK01～04)を調査する。次いで平成22年３月11日から同年３月31日まで実施し、竪穴建物跡５軒(SI08～13)、掘立柱建物跡１棟(SB01)、土坑１基(SK06)を検出し、時期的にみると古墳時代の竪穴建物跡４軒、奈良時代の竪穴建物跡５軒、平安時代２軒、不明２軒を確認する。第２次調査区の対象区域は第１次調査区の南側および調査区西側である。まず平成22年５月17日から同年５月31日まで実施し、第１次調査区の南側で、改めて竪穴建物跡５軒、土坑２基、新たに確認された柱穴状遺構２基の調査を実施する。次いで同年６月４日から７月14日間で新期の西側調査区を対象に実施する。すでに検出されている竪穴建物跡SI11をはじめ、新たな竪穴建物跡４軒、土坑３基、柱穴状遺構６基を調査し、調査した竪穴建物跡５軒はいずれも古墳時代に比定される。以上のように調査対象区が現在使用中の道路が掛かることから非常に制約された調査区の設定であった。このため調査方針の基本は、まず重機に



第１図　グリッド配置図



第2図　遺跡周辺地形図（1：2,500）



第3図　試掘調査トレンチ配置と遺構検出状況

よる表土除去から開始し、遺構確認のための精査を人力により行う。確認調査で把握されていた黒色土の落ち込み部はすべて竪穴建物跡もしくは土坑である。これら竪穴建物跡を中心に丁寧な精査を繰り返す。さらに円形基調の土坑をはじめ、柱穴状遺構(ピット)を検出する。竪穴建物跡は調査区全体からほぼ万遍なく検出され、6世紀後半の古墳時代後期および8世紀代前半の奈良時代に集落形成の中心があり、しかも全体的な集落はむしろ平坦面の広がる北側に展開することが予想されることから、ここ調査対象地は東側の限界にあたるものと推定される。また旧石器時代の調査については、調査区の制約からソフトローム上面で遺物等が検出された場合のみ本調査をおこなうこととし、結果的に出土遺物が確認できなかったことから一部深掘調査のみとなった。述べ日数50日の発掘調査の結果、竪穴建物跡17軒、土坑8基、柱穴状遺構(ピット)8基を検出し、調査を完了する。

なお、調査区の設定にあたっては、国家座標を基準とし、調査区南西隅のX軸－60,890m、Y軸＝5,040mの交点を基準点する10m×10mのグリッドを設定し、南から北に向かってA～F、西から東に向かって1～15とし、それぞれの区はA－1区のように呼称し、遺構の所在および遺構外出土遺物のすべての地点を明確にすることとした(第1図)。

(小川和博)

第3節　調査日誌

2010年2月8日～2月23日、3月11日～3月31日

2・8　本日より発掘調査を開始する。重機による表土層除去。遺構検出のため精査を開始し、竪穴建物跡(SI01)を検出。

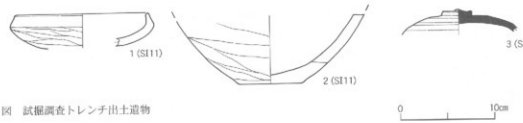
2・9　重機による表土層除去作業終了。遺構検出のため精査継続。竪穴建物跡(SI02)を検出。

2・10　遺構検出のため精査作業終了。竪穴建物跡(SI03、04)を検出。

2・12　竪穴建物跡(SI03～05)、土坑(SK01)を検出。

2・16　竪穴建物跡(SI03、05～07)、土坑(SK02、03)を検出。

2・17　竪穴建物跡カマド調査(SI02～05)。土坑調査(SK03)。土層断面実測(SI02～07、SK01、03)。



第4図　試掘調査トレンチ出土遺物

2・19　竪穴建物跡土層断面実測(SI06)。遺構写真撮影(SI05、07、SK01、02、04)、平面図実測(SI01～04)・全測図作成。
2・22　遺構平面図実測(SI05～07、SK01～04)。貼床除去調査を開始する(SI01～05、07)。調査区全景写真撮影。
2・23　貼床除去調査の継続(SI05～07)。北側調査区の調査を終了する。
3・11　北側調査区の埋め戻し作業。本日より南側調査区の調査を開始する。重機による表土層除去開始。遺構検出のため精査。
3・12　重機による表土層除去作業終了。遺構検出のため精査終了。
3・15～18　竪穴建物跡(SI08～13)、土坑(SK05、06)を検出。
3・19　竪穴建物跡(SI13)を検出。貼床除去調査を開始する(SI08、09)。
3・22　遺構全景写真撮影(SI11～13、SB01)。遺構平面実測(SI10、土坑SK06)。全測図作成。竪穴建物跡土層断面実測(SI12、13)。掘立柱建物跡を検出(SB01)。
3・24　貼床除去調査の継続(SI08、09)。
3・27　貼床除去調査の継続(SI08～13)。竪穴建物跡土層断面実測(SI11)。遺構の平面実測(SI11～13、SB01)。南側調査区の調査を終了する。
3・30　南側調査区の埋め戻し作業。
3・31　器材撤収作業。
2010年5月17日～5月31日、6月4日～7月14日(第2次調査)
5・17　本日より調査を開始する。重機による表土層除去開始。遺構検出のため精査を開始。
5・19　重機による表土層除去と仮設道路設営終了。遺構を検出(SI03、05～07、SK03)。
5・21　遺構検出調査(SI03、05～07、SK03)。
5・25　遺構検出調査の継続(SI05～08、SK01)。竪穴建物跡カマド調査(SI06)。
5・26　竪穴建物跡を検出(SI08)。
5・27　竪穴建物跡を検出(SI06、08)。竪穴建物跡土層断面実測(SI06、08)。遺構平面図実測(SI03、05～07、SK01、03、Pit01、02)。
5・28　遺構平面図実測(SI06、08)。竪穴建物跡土層断面実測(SI08)。遺構写真撮影・土層断面実測(SI03、05、07、SK01,03、Pit01、02)。
5・31　竪穴建物跡貼床を除去(SI06、08)。
6・3　東側調査区域の重機による埋め戻し作業。
6・4～5　重機による表土層除去。遺構検出のため精査作業。
6・7　表土層除去作業と精査作業の継続。遺構を検出(SI11、14)。
6・8～9　重機による表土層除去作業の終了。遺構検出のため精査の継続。竪穴建物跡(SI14)を検出。
6・10　遺構を検出(SI15、SK07、Pit03～05)。
6・11　遺構検出の継続(SI11、SK07)。竪穴建物跡カマド調査(SI14)。土層断面実測(SI14、15、SK07)。遺構平面図実測(SI14、15、SK07、Pit03～05)。
6・12　竪穴建物跡断面実測(SI11)。全測図作成開始。
6・13　遺構検出(SI11、SB01、Pit06、07)。
6・15　遺構写真撮影(SI11、14、15、SK07、SB01、Pit03～07)。竪穴建物跡貼床除去(SI14)。
6・17　竪穴建物跡貼床除去(SI11、14、15)。遺構写真撮影(SI11、SB01、Pit06、07)。
6・21　重機による埋め戻し作業終了。
6・25　南側調査区域を重機による表土層除去作業開始。竪穴建物跡検出(SI14、16)。
6・26　遺構検出(SI14、16、17、SK08、Pit08)。竪穴建物跡全景写真撮影(SI14)。
6・28　重機による表土層除去作業完了。遺構検出のため精査継続し、竪穴建物跡を新たに検出する(SI17)。竪穴建物跡カマド調査(SI16)。全景写真撮影。
6・29　竪穴建物跡カマド調査(SI16)。遺構平面図実測(SI14、16、SK08、Pit08)。

7・1　竪穴建物跡貼床除去(SI14)。遺構平面図実測(SI16、17、SK08、Pit08)。
7・2　竪穴建物跡貼床除去(SI14、16、17)。本日にて発掘調査を完了する。
7・14　器材撤収作業。

(大渕淳志・遠藤啓子)

第4節　遺跡の位置と周辺遺跡

1．遺跡の位置（第2・5図）

上の塙遺跡は、北緯36° 02′ 40″ 14、東経140° 30′ 36″ の茨城県南東部、行方市杉平字上ノ塙82外に所在する。行方市は平成17年に麻生町、北浦町、玉造町の三町が合併して誕生した新しい町でかつては行方郡に含まれていた。今回調査対象となった上ノ塙遺跡は旧三町のうち麻生町に所在する。行方市周辺は東に北浦、西に霞ヶ浦(西浦)に挟まれた幅6～8kmという細長い行方台地が南側へ半島状に突出する。しかも西側は比較的なだらかな沿岸線に対し、東側は侵食の著しいリアス状地形を形成する極端な相異なる様相を示している。本遺跡はこの侵食による開析地形が特徴的な北浦の西沿岸側に位置する。この北浦西沿岸のうち行方市内には少なくとも6河川が間隔をおかずに密集して北浦に流れ込んでおり、上ノ塙遺跡は南側に位置する蔵川の左岸に当たる。また北側には柏原付近を源とする小河川に挟まれた舌状台地が東側へ突き出ており、その中央付近に位置する。周辺の地形を概観すると、北側は平坦面が拡がり南側に舌状台地が延びていく。そのひとつに上ノ塙遺跡の立地する南東方向に走向をもつ幅狭い尾根状の台地である。ここは標高36.3mを最高位にしてさらに南東方向に向かって緩傾斜していく。集落はその最高位の平坦面に形成されている。北東側および南西側は急傾斜し現水田面に達する。その比高差は北側で24m、南側で27mを測る。調査前の現況は畑地と道路で、遺跡西側は県道水戸・鉾田・佐原線によって境される。

2．周辺の遺跡（第5図）

上ノ塙遺跡が立地する行方市は西に霞ヶ浦(西浦)、東に北浦に挟まれた南北に延びる行方台地上に位置している。本遺跡はその北浦に流れ込む山田川と蔵川によって開析された舌状台地に立地しており、周辺はいうまでもなく水利に恵まれた豊かな肥沃な環境を呈している。そのため旧石器時代から中近世に至るまで数多くの遺跡が知られており、各時期それぞれ学史的に古くから注目されている遺跡が多いのも特徴である。また旧麻生町内は茨城大学により遺跡分布調査が行われ、(茨城大学1997)、さらに麻生町史編さん委員会でも詳細に実施しており(川井・市毛2002)、周辺の遺跡の記載についてはこれらを参照しながら時期ごとに主な遺跡を列挙していく。

まず旧石器時代については行方市内においてはその「様相把握が停滞している地域である(窟田2006)。」との指摘とおり市内で現在まで12遺跡が報告されているに過ぎず、いずれも主体となる遺跡ではなく、他時期の遺構覆土に含まれたものもあり不明な点が多い。次の縄文時代については旧麻生町内では157遺跡が確認されている。なかでも中期の遺跡が集中しているのも特徴で69ヶ所が確認されている。因みに早期33ヶ所、後期38ヶ所、晩期11ヶ所となっており、この傾向は関東地方において同じ様相を呈していることを示している。また霞ヶ浦側とここ北浦側では遺跡密度からみて、前者が中期以降に集中するのに対し、後者北浦側では前期以前に形成された遺跡が集中するとの見解がある(川井・市毛2002)。そうしたなか昭和51年大和第一小学校敷地内に所在する小牧石塁遺跡(A001・002)が特筆される。報告書では古墳時代が中心となっているが、C地区の貝塚調査において膨大な遺物量から阿玉台式、加曽利E式前半期の集落跡の存在が推定される。また平成18年市道改良工事に伴い、しかも本遺跡に隣接する杉平貝塚が調査されている。道路敷地のため斜面部を中心に発掘が進められ、標高7～12mという低位部から遺物包含層が検出された。時期は中期中葉・阿玉台Ⅰb式期からから後葉・加曽利E1式期の短期間に形成されたもので、貝殻廃棄を行わない、いわゆる「土器捨て場」遺跡である。若干離れるが旧北浦町鬼越貝塚が昭和29年に調査されている。斜面貝塚の一部を学術調査し、後期後半の貝塚で多量の土器と伴に骨角器や土製品などが出土しており、資料はいずれも一級品である。

弥生時代では53遺跡が周知され、本遺跡の所在する蔵川流域に集中する傾向にある。本遺跡周辺でも小山遺跡(A233)と反対の台地上に中台A遺跡(A230)及び中台B遺跡(A231)が所在し、蔵川右岸でも離谷遺跡(A121)、青木台遺跡(A239)、中坪遺跡(A200)等が知られ、その時期は中期後半から後期である。また平成7年に調査された出津平

A234トノ塙遺跡　A001小佐島1貝塚　A002小牧塚2貝塚　A003井久保貝塚　A004大塚古墳　A005篤平塚古墳群　A006姉手貝塚　A007権現山古墳群
A033電田貝塚　A036杉平貝塚　A046出塚平遺跡　A047塚ノ内遺跡　A048台遺上遺跡　A049指神西遺　A121鶴谷遺跡　A151衛池西遺跡
A152引取遺跡　A153新地遺跡　A154御地原遺跡　A155根小屋貝塚甲屋　A157雨の宮遺跡　A158シダキ遺跡　A160三塚塚　A161鴻山台遺跡
A162金塚遺跡　A163向谷遺跡　A183原目台遺跡　A184トロクボ遺跡　A185福田台遺跡　A186細田台遺跡　A187東ノ入遺跡　A188山ノ神遺跡
A190アンゴウ台遺跡　A191アンゴウ台南遺跡　A192渡塚遺跡　A193供養塚遺跡　A194西之台遺跡　A195手納山遺跡　A196千鶴山古墳
A197渡塚中央遺跡　A198引取北遺跡　A199甲塚古墳群　A200中野遺跡　A201中神供養塔　A202台北遺跡　A203熊塚塚　A204台南遺跡
A208青田供養塔　A206六十六部供養塔　A207渡塚塚寺跡　A208笹塚遺跡　A210十三仏遺跡　A218小牧台東遺跡　A219小牧台東遺跡　A220宮平遺跡
A221石宮遺跡　A222横原遺跡　A223横原貝塚　A224三本松遺跡　A225坂ノ上貝塚　A226廻山塚跡　A227小牧館跡　A228原畑遺跡　A229牧峠十三塚
A230中台A遺跡　A231中台B遺跡　A232中台供養塚　A233小山遺跡　A235形原廣中塚　A236高芝遺跡　A237塚ノ山遺跡　A239青木台遺跡
A240新左衛門山遺跡　A241B塚坐甲塚　A242役人山遺跡　A243石塚古墳　A244新地供養塚群　A245高芝古墳　A263金塚台遺跡　A280小牧台東遺跡
A292宮平南遺跡　K001塚原古墳群　K002塚塚古墳群　K003勝境山古墳群　K009竹山古墳群　K019吉屋台塚形跡　K031鬼越貝塚　K032山津平貝塚
K035志者遺跡　K036新林貝塚　K039吉原平遺跡　K068前原館跡　K094瀬早遺跡

第5図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1：25,000）

遺跡(A46)、台道上遺跡(A48)がある。報告書の刊行が遅れているものの資料は良好である。

古墳時代でも集落遺跡91遺跡、古墳81基が周知されている。やはり弥生時代と同様、集落遺跡ではここ蔵川流域に数多く遺跡が集中する傾向にある。縄文時代でも触れた小牧遺跡(A001・002)では3軒の竪穴建物跡が検出されている。6世紀後半の時期に比定され、小牧台古墳群の拠点的集落の可能性が指摘されている。また台道上遺跡(A048)では5軒の竪穴建物跡が調査されている。台道上遺跡と隣接する出津平遺跡(A046)において22軒の竪穴建物跡が検出され、台道上遺跡と併せた拠点的集落である。さらに十三仏遺跡(A210)では5世紀1軒、6世紀16軒の竪穴建物跡が検出されて、しかも台地平坦面から東側斜面にかけて集落が営まれており、平坦面のみが建物の立地条件ではないことを示していた。

次ぎの奈良・平安時代では本遺跡を含め各地区で確認されており、その数は137遺跡以上にのぼる。ここ蔵川流域ではまず出津平遺跡(A046)において奈良時代8世紀の竪穴建物跡がまとまって検出されている。8世紀前葉では竪穴建物跡15軒検出し、最大規模一辺7m、最小規模3m台の建物が確認され、8世紀中葉では最大4mの竪穴建物跡4軒。さらに8世紀後葉では6軒の竪穴建物跡が検出され、最大6m、最小3m台の竪穴建物跡が確認された。なお、9世紀以降でも集落規模は大きくなり36軒。10世紀代でも26軒の竪穴建物跡が確認されている。また遺物も豊富で墨書土器をはじめ、施釉陶器、鋤先や鎌などの鉄製品。紡錘車や砥石などの石製品が出土している。そのほか城ノ内遺跡(A047)、台道上遺跡(A048)、石堂遺跡(A221)で発掘調査が実施され明確な集落跡として注目されている。これらに本遺跡が加わることで蔵川流域における8世紀から10世紀にかけての拠点的集落がより鮮明になってきた。少なくとも出津平遺跡の集落は、道田郷の主心的な集落であったと推定できる。なお、本遺跡の北側、金牛尻では鉄滓が表採でき、製鉄関連遺跡の可能性がある。

最後に中世では城跡として篭田城跡((A226)をはじめ小牧館跡(A227)や洞台城跡、板峰砦跡、倉河(蔵川)館跡が知られているが、篭田城跡は帯曲輪や堀切、土塁等が遺存している。また板峰砦跡でも土塁・堀跡が残存している。また近世の塚として椋小屋庚申塚(A155)、中坪供養塚(A201)、板峰十三塚(A229)などが周知されている。

(小川和博・遠藤啓子)

表1　上ノ場遺跡と周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代・時期	備考
A 234	上ノ場遺跡	包蔵地	縄文、弥生、奈良・平安	
A 001	小牧第1貝塚	貝塚	縄文、古墳、奈良・平安	S51発掘調査
A 002	小牧第2貝塚	貝塚	縄文、古墳、奈良・平安	
A 003	井久保貝塚	貝塚	縄文	
A 004	大塚古墳	古墳	古墳	
A 005	堀筆塚古墳群	古墳群	古墳	
A 006	岡平貝塚	貝塚	縄文	
A 007	権現山古墳群	古墳群	古墳	
A 033	篭田貝塚	貝塚	縄文	
A 036	杉平貝塚	貝塚	縄文	H7発掘調査
A 046	出津平遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安	H7発掘調査
A 047	城ノ内遺跡	城館跡	中世	H7発掘調査
A 048	台道上遺跡	集落跡	奈良・平安	H7発掘調査
A 049	板峰砦跡	城館跡	中世	H7発掘調査、
A 121	鷹谷遺跡	包蔵地	縄文	
A 151	新地遺跡	包蔵地	奈良・平安	
A 152	引取遺跡	包蔵地	古墳、奈良・平安、中世	
A 153	新地遺跡	包蔵地	古墳、奈良・平安	
A 154	新地東遺跡	包蔵地	奈良・平安	
A 155	椋小屋庚申塚	塚	近世	
A 157	天の宮遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳	
A 158	シタキ遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安	
A 160	三瀧塚	塚	中世	平山ミノスケ墓伝承
A 161	堀山台遺跡	包蔵地	奈良・平安、中世	
A 162	金塚遺跡	包蔵地	縄文	

番号	遺跡名	種別	時代・時期	備考
A163	西仰寺遺跡	包蔵地	縄文、奈良・平安	
A183	原目台遺跡	包蔵地	奈良・平安	
A184	トロクボ遺跡	包蔵地	縄文、奈良・平安	
A185	細田台南遺跡	包蔵地	縄文、弥生、奈良・平安	
A186	細田台北遺跡	包蔵地	弥生、奈良・平安、中世	
A187	東ノ入遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳	
A188	山ノ神遺跡	包蔵地	弥生、古墳	
A190	アンゴウ台遺跡	包蔵地	縄文、弥生、奈良・平安	
A191	アンゴウ台南遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安	
A192	波無遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安	
A193	供養塚遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安	
A194	西之台遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安	
A195	不動山遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳	
A196	不動山古墳	古墳	古墳	後円部一部原滅
A197	浪越甲夫遺跡	包蔵地	古墳、奈良・平安	
A198	引取北遺跡	包蔵地	古墳	
A199	向地古墳群	古墳群	古墳	
A200	中坪遺跡	包蔵地、貝塚	縄文、弥生、古墳	
A201	中坪供養塚	塚	近世	
A202	台北遺跡	包蔵地	縄文、奈良・平安	
A203	熊様塚	塚	近世	
A204	台南遺跡	包蔵地	古墳、奈良・平安	
A205	青沼庚申塚	塚群	近世	
A206	六十六部供養塚	塚	近世	
A207	波無廃寺跡	寺跡跡	奈良・平安	
A208	笹塚遺跡	包蔵地	縄文、中世	
A210	十三仏遺跡	包蔵、集落跡	旧石、縄文、古墳	H9発掘調査、
A218	小牧台西遺跡	包蔵地	古墳、奈良・平安	
A219	小牧台東遺跡	包蔵地	奈良・平安	
A220	宮平遺跡	包蔵地	縄文、奈良・平安	
A221	石堂遺跡	集落跡、包蔵地	縄文、古墳	S53～54発掘調査
A222	横原遺跡	包蔵地、貝塚	縄文、古墳	横原貝塚を含む
A223	横原貝塚	貝塚	縄文	
A224	三本松遺跡	包蔵地	縄文、古墳	
A225	坂ノ上貝塚	貝塚	縄文	
A226	笹田城跡	城館跡	中世	
A227	小牧館跡	城館跡	中世	
A228	熊畑遺跡	包蔵地	奈良・平安、中世	
A229	坂越十三塚	塚	近世	17基現在所在不明
A230	中台A遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳	
A231	中台B遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安	
A232	中台供養塚	塚群	近世	
A233	小山遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳	
A235	杉原庚申塚	塚	近世	庚申塚
A236	高芝遺跡	包蔵地	縄文、古墳	
A237	諸ノ山遺跡	包蔵地	古墳	
A239	青木台遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳	
A240	新左衛門山遺跡	包蔵地	古墳、中世	
A241	四鹿庚申塚	塚	近世	塚上に江戸期の石祠有
A242	役人山遺跡	包蔵地	縄文、古墳	
A243	石堂砦跡	城館跡	中世	
A244	新地供養塚群	塚群	近世	
A245	高芝古墳	古墳	古墳	S46頃内石棺発見
A289	金堀台遺跡	包蔵地	古墳、奈良・平安	北西部庚申塚
A290	小牧台北遺跡	包蔵地	縄文、古墳、奈良・平安	小牧台遺跡同一と推定
A292	吉平両遺跡	包蔵地	縄文、古墳、奈良・平安	
K001	塚原古墳群	古墳群	古墳	
K002	賢尊古墳群	古墳群	古墳	
K003	権現山古墳群	古墳群	古墳	
K009	台山古墳群	古墳群	古墳	H5湮滅
K019	古屋台館跡	城館跡	中世	
K031	鬼越貝塚	貝塚	縄文、弥生、古墳	S29発掘調査、

番号	遺跡名	種別	時代・時期	備考
K032	山津平貝塚	貝塚	縄文、弥生、古墳	
K035	志谷遺跡	一	縄文	湮滅
K036	新林貝塚	貝塚	古墳	
K039	古屋平遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳	
K068	前原館跡	城館跡	縄文、近世	
K094	風早遺跡	包蔵地	古墳	H12発掘調査

参考文献

川井正一他2002「麻生町史　通史編」『第一編原始古代』麻生町史編さん委員会

慶応義塾高等学校考古学会1955「茨城県行方郡津澄村繁昌鬼越貝塚発掘調査報告」　Archaeology22

窟田恵一2006「茨城県南東部・行方台地の旧石器－潮来市今林遺跡・行方市木工台遺跡の資料を中心に－」茨城県考古学協会誌第18号　茨城県考古学協会

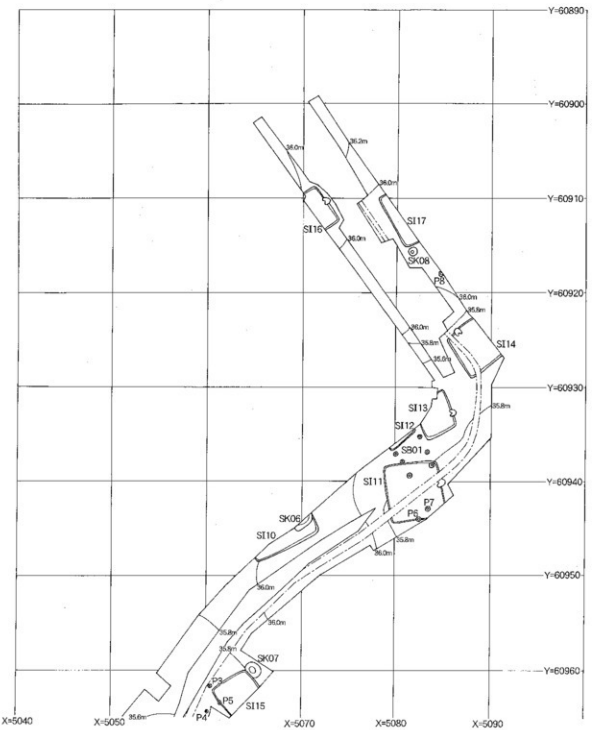
藤原　均1999「茨城県行方郡麻生町十三仏遺跡第１次調査報告書」十三仏遺跡調査会

汀　安衛1999「茨城県行方郡麻生町十三仏遺跡第２次発掘調査報告書」十三仏遺跡調査会

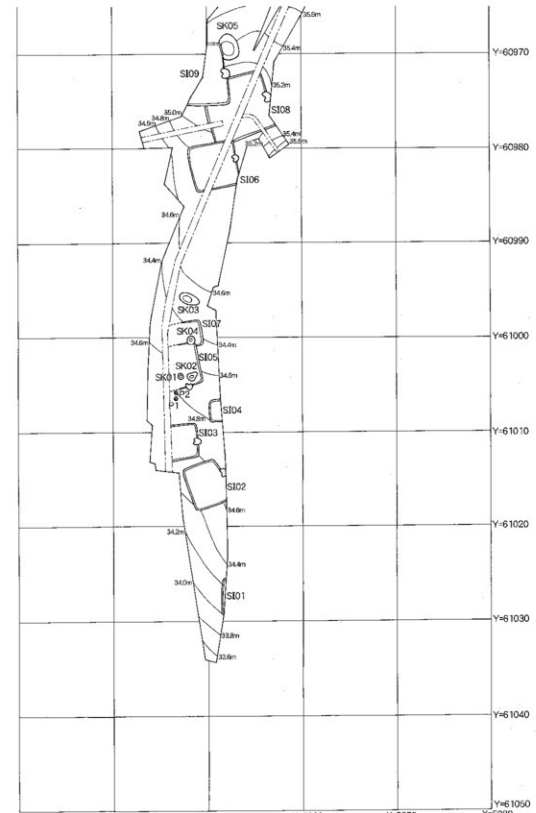
汀　安衛2007「茨城県行方市杉平遺跡発掘調査報告書」行方市遺跡調査会

丸子　亘1978「小牧石堂遺跡発掘調査報告書」小牧石堂遺跡発掘調査会

茂木雅博他1997「麻生町の遺跡」茨城大学人文学部考古学研究室・麻生町教育委員会


Y=60890
Y=60900
Y=60910
Y=60920
Y=60930
Y=60940
Y=60950
Y=60960
X=5040
X=5050
X=5070
X=5080
X=5090
SI16
SI17
SK08
P8
SI14
SI13
SI12
SB01
SI11
P7
P6
SK06
SI10
SK07
P3
P5
SI15
P4
0
20m

第６図　遺構配置図（1）


SK05
SI09
SI08
SI06
SK03
SK04
SI07
SI05
SK02
SK01
P2
P1
SI04
SI03
SI02
SI01
35.6m
35.4m
35.2m
35.0m
34.8m
35.4m
35.6m
34.6m
34.4m
34.6m
34.6m
34.4m
34.8m
34.8m
34.6m
34.2m
34.4m
34.0m
33.8m
33.6m
Y=60970
Y=60980
Y=60990
Y=61000
Y=61010
Y=61020
Y=61030
Y=61040
Y=61050
X=5030
X=5040
X=5050
X=5060
X=5070
X=5080
0
20m

第7図　遺構配置図（2）

第2章　検出された遺構と遺物

第1節　概要（第6・7図）

上ノ塙遺跡は北浦に流れ込む蔵川の左岸の標高36mの舌状台地上に形成された古墳時代および奈良・平安時代の集落跡である。周知される遺跡の範囲もほぼ舌状台地上に納まり、南側に位置する杉平貝塚とは様相を異にする。今回の調査では道路幅という制限された区域が対象地となっているものの、古墳時代、奈良時代、平安時代の竪穴建物跡が17軒検出され、出土遺物も豊富である。先に調査された拠点的集落の典型である出津平遺跡とほぼ同時期の集落形成であることからその関連が注目されている。なお、現状は畑地と道路である。

第2節　基本層序（第8図）

今回の調査では調査区の制約から、旧石器時代に係る文化層を確認するための深掘調査は縮小された。ソフトローム層上面において遺物が確認された場合のみ調査を実施することとなったが、関連する遺物の出土はなかった。ここで道路幅調査のため竪穴建物の掘削面が明瞭な竪穴建物跡SI01の壁面に肉眼観察層を設定し調査を実施した。あいにく明確な旧石器文化層や遺物は検出できなかったものの、部分的にローム層の調査ができ、市内における今後の調査の資料に供したい。観察した地点は台地中央部の緩傾斜面である。ここでの鍵層はⅢ層のソフトローム層、Ⅴ層の第2黒色帯に相当する暗褐色ローム層である。

Ⅰ層　褐灰色土(10YR4/1)　表土層。

Ⅱ層　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)　少量のローム粒子を含む。締りがあり、粘性はやや弱い。

Ⅲ層　黄褐色軟質ローム層(10YR5/6)　ソフトロームである。軟弱である。層厚は8～15cm前後を測る。締りにやや欠け、粘性は普通である。

Ⅳ層　明黄褐色硬質ローム層(10YR7/4)　やや明るいハードローム層。堅緻で締りがある。層厚は18～21cm前後を測る。

Ⅴ層　暗褐色硬質ローム層(10YR3/3)　全体的に暗いハードローム層で、第2黒色帯に相当するものと思われる。締りがある。層厚は23～27cmを測る。

Ⅵ層　黄橙色硬質ローム層(10YR8/8)　上層よりも明るいハードローム層。締りがある。層厚は最大28cmを測る。

Ⅶ層　浅黄橙色硬質ローム層(10YR8/4)　上層よりも全体的に暗いハードローム層。締りがある。

（小川和博）

第3節　調査区出土の縄文時代・弥生時代の遺物（第9図）

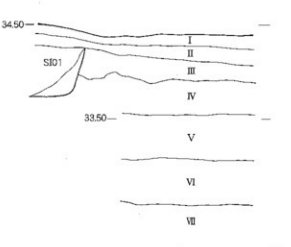
本調査区から多くの遺物が出土している。大半は土師器および須恵器であり、いずれも竪穴建物跡に伴なうものである。しかし、こうした遺構内には時期の異なる流れ込みと判断される縄文土器および弥生土器が出土している。今回の調査では確認できなかったが、周囲にはこれらの時期の遺構の存在が確実視される。

1）縄文土器（1・2）

1は深鉢の胴部破片。アナダラ属貝殻腹縁文が施されたもので前期後葉・浮島Ⅱ式土器。2は深鉢・口縁部破片。粘土帯で囲った隆帯貼付による小突起をもつ。中期中葉・阿玉台Ⅰa式土器。

2）弥生土器（3～17）

3～5はいずれも壺の胴部破片。2本平行沈線文で渦巻文あるいは幾何学文が施されている。6～16は縄文施文である。6～15は付加条縄文。16は無節縄文施



第8図　基本層序

文である。17は蓋形土器に分類されるもので(鈴木1998)、２本平行沈線文による鋸歯状文が施文され、天井部の器外面は不明瞭であるが木葉痕と推定される。中期・足洗２式期に比定される。

３）縄文時代の石器（18）

18は周辺からの表採資料である。ホルンフェルス製の磨器である。楕円形の扁平自然礫を用いた片刃の磨器。長さ6.92cm、幅4.41cm、厚さ1.35cm、重さ59.5gを測る。

参考文献

鈴木素行1998「武田石高遺跡　旧石器・縄文・弥生時代編」(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第15集　(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

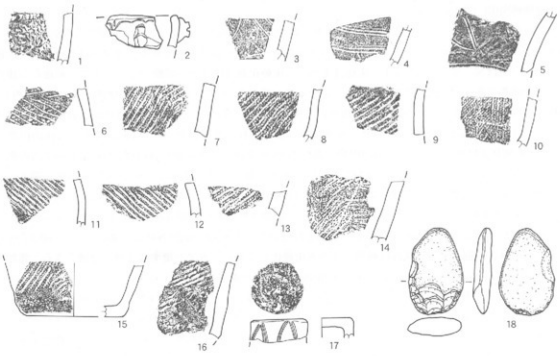
第４節　竪穴建物跡

１）竪穴建物跡SI01（第10図）

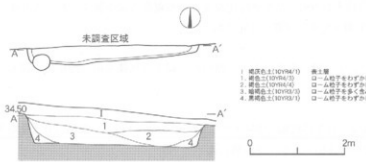
調査区の東端、Ｂ－14区に位置する。北側大半が未調査区域に広がっており、検出部は南壁辺のみである。立地する標高は34.10mのほぼ平坦部で、規模は東西軸長3.91m、検出された南北軸長0.31mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されたものとすると、主軸方位はＮ－0°を示す。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は26.0cmを測る。壁溝は構築されていない。柱穴は検出できない。覆土は４層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。遺物は図示できるものはなく、わずかに土師器破片２点出土するのみであるが、本跡は古代に推定される。

２）竪穴建物跡SI02（第11～13図）

調査区の東側、Ａ・Ｂ－13区に位置する。建物北東隅が未調査区域に延びている。立地する標高は34.59mのほぼ平坦部で、規模は南北軸長3.97m、東西軸長4.21mを測り、平面形は方形を呈する。カマドは北壁辺中央に設置されており、主軸方位はＮ－19°－Ｗを示す。床面は平坦で、床硬化面は柱穴間にみられ、とくにカマド前面から建物の中央部がとくに顕著であった。壁面は垂直気味に立ち上がり、壁高は17.0～51.0cmを測る。壁溝は南辺に掘削部が欠ける部分がみられる。規模は上面幅で18.0～28.0cm、深さ8.0cmの横断面Ｕ字状を呈する。柱穴は主柱穴４本と



第９図　調査区出土縄文時代・弥生時代の遺物



第10図　竪穴建物跡SI01実測図

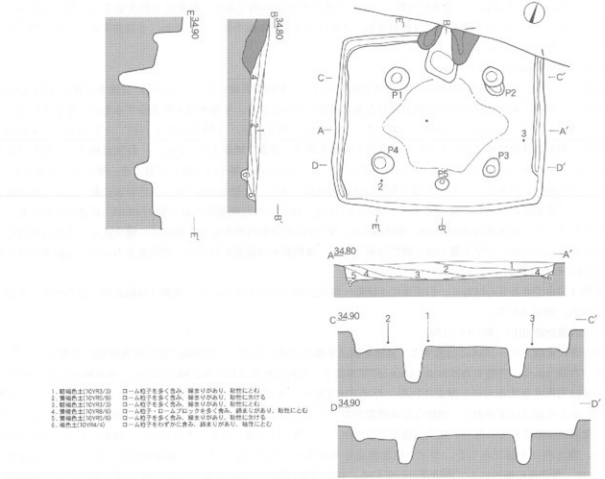
梯子穴１本の計５本が穿ってある。主柱穴として北西側Ｐ１は径52.0×51.5cmの円形、深さ74.3cm。北東側Ｐ２は径67.0×40.0cmの楕円形、深さ59.3cmを測る。南東側Ｐ３は径45.0×35.0cmの楕円形、深さ61.3cm。南西側Ｐ４は径52.0×48.0cmの円形、深さ47.5cm。梯子穴Ｐ５は南辺中央に位置し、径29.0×28.0cmの円形、深さ14.0cmを測る。覆土は６層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、北東隅が未調査区域に延びているが、遺存状況は比較的良好である。北壁面を35.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ122.0cm、検出された両袖間の最大幅87.0cm、袖部は灰白色粘土で構築されている。火床部は長さ78.0cm、幅82.0cm、深さ17cmの楕円形を呈し、摺鉢状に掘り込み、底面は被熱による赤化硬化している。カマド覆土は２層に分層できる。建物掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ４cm前後にわたり掘削している。

遺物として須恵器・高台坏、蓋が出土している。１の高台坏は底部のみ。高台は貼付。２・３は蓋。２は扁平のボタン状のツマミが付き、天井部が回転ヘラケズリ。３は天井部が回転ヘラケズリで屈折して稜をなす。新治窯産。本跡は８世紀第１四半期に比定される。

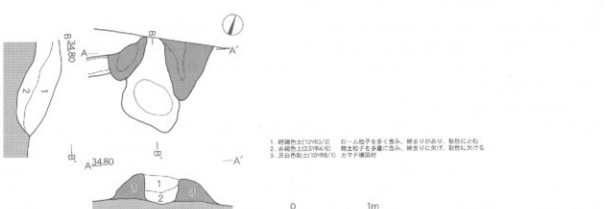
３）竪穴建物跡SI03（第14～16図）

調査区の東側、Ａ－12・13区に位置する。建物南壁面が未調査区域に広がっている。立地する標高は34.72mのほぼ平坦部で、規模は南北軸長3.55m、東西軸長3.77mを測り、平面形は方形を呈する。カマドは北壁中央に設置されており、主軸方位はＮ－3°－Ｗを示す。床面は平坦で、床硬化面は柱穴間が明瞭でとくにカマド前面から建物の中央部がとくに顕著であった。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は1.0～49.0cmを測る。壁溝は北辺西側、西辺北側、北東隅側に掘削部が欠ける部分がみられる。規模は上面幅で17.0～31.0cm、深さ5.0～10.0cmの横断面Ｕ字状を呈する。柱穴は主柱穴４本と梯子穴１本の計５本穿ってある。主柱穴北西側Ｐ１は径18.5×18.0　cmの円形、深さ20.5cm。北東側Ｐ２は径39.5×32.0cmの円形、深さ27.0cmを測る。南東側Ｐ３は径24.0×21.0cmの円形、深さ28.0m。南西側Ｐ４は径20.5×19.5cmの円形、深さ31.0cm。梯子穴Ｐ５は径25.5×25.0cmの円形、深さ34.0cm。覆土は３層に分層でき、埋め戻し土層である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を25.0cm三角形状に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ105.0cm。検出された両袖間の最大幅111.0cm、袖部は灰白色粘土で構築されている。火床部は長さ68.0cm、幅56.0cm、深さ7.0cmの楕円形を呈し、摺鉢状に掘り込み、底面は被熱による赤化硬化している。カマド覆土は２層に分層できる。建物掘形は底面がわずかに起伏あるものの、全面的に深さ３cm前後にわたり掘削している。

遺物として土師器・甕。須恵器・坏、蓋、鉄製品である小型鎌、釘が出土している。１は土師器・甕。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部端部は短く摘み上げられている。２は須恵器・坏の底部破片。底部は手持ちヘラケズリ。３・４は蓋。扁平のボタン状のツマミが付き、天井部が回転ヘラケズリで屈折して稜をなす。４は新治窯産。５・６は鉄製品である。５は小型の鎌の破片であろう。刃先を欠損している。刃先に向かって緩いカーブを描き、身幅も次第に狭くなっていく。基部は取り付け部にあたり折り曲げている。現存長5.76cm、最大幅2.73cm、背厚0.33cm、



第11図　竪穴建物跡SI02実測図



第12図　竪穴建物跡SI02カマド実測図

第13図　竪穴建物跡SI02出土遺物

重さ14.16g。また6は釘で、両端が欠損しており全体の形状は不明である。断面は方形を呈する。現存長6.53cm、軸幅0.65cm、重さ6.62gを測る。4は新治窯産。本跡は8世紀第1四半期に比定され、3は若干新しく第1四半期から第2四半期に比定される。

4）竪穴建物跡SI04（第17・18図）

調査区の東側、B－12区に位置する。建物北側半分以上が未調査区域に広がっている。立地する標高は34.82mの平坦部で、規模は東西軸長2.50m、検出された南北軸長1.43mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは覆土の状況から判断して西壁に設置されているものと推定でき、主軸方位はN－87°－Wを示す。床面はほぼ平坦。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は2.0cmを測る。壁溝は構築されていない。柱穴は梯子穴と思われる西側に1本穿ってある。P1は径18.0×18.0cmの円形、深さ10.0cm。覆土は4層に分層でき、埋め戻し土層である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を65.0cm三角形状に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ132.0cm、検出された両袖間の最大幅97.0cm、袖部は灰白色粘土で構築されている。火床部は長98.0cm、幅62.0cm、深さ27cmの楕円形を呈し、摺鉢状に掘り込み、底面は被熱による赤化硬化している。カマド1層は2層に分層できる。建物掘形は底面がわずかに起伏あるものの、全面的に深さ3cm前後にわたり掘削している。

遺物は図示できるものはなく、わずかに土師器・坏底部破片が出土するのみ、底部は回転糸切り痕を残す。本跡は10世紀代に推定される。

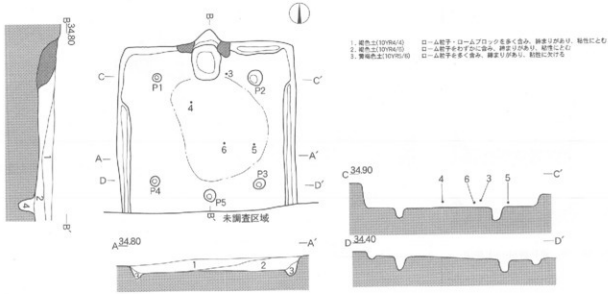
5）竪穴建物跡SI05（第19～21図）

調査区の東側、A－12区に位置する。建物東側は未調査区域に広がり、南西隅に竪穴建物跡SI07が重複しており、本跡が古期である。立地する標高は34.90mの平坦部で、規模は検出された南北軸長3.75m、東西軸長4.56mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁やや西寄りに設置されており、主軸方位はN－15°－Wを示す。また床面はほぼ平坦で、明瞭な貼床構築がみられない。壁面は外傾して立ち上がり、壁高は3.0～19.5cmを測る。壁溝は構築されていない。柱穴は検出できなかった。覆土は3層に分層できるものの、薄層である。明瞭ではないが、埋め戻し土層であろう。カマドは北壁辺やや西寄りに設置されており、遺存状況は不良である。北壁面を65.0cm三角形状に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ98.0cm、検出された両袖間の最大幅92.0cm、袖部は灰白色粘土で構築されている。火床部は長52.0cm、幅65.0cm、深さ8.0cmの楕円形を呈し、摺鉢状に掘り込み、底面は被熱による赤化硬化している。カマド覆土は2層に分層している。建物掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ2.0cm前後にわたり掘削していた。

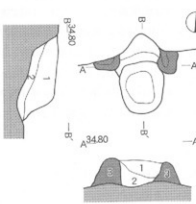
遺物は土師器・高台坏、高台塊、足高高台塊、甕が出土している。1～3は高台坏。1は体部が外傾しながら開く。内黒。2は口径に対し器高が低い体部。3は高台が短く付く。4は高台塊。高台はハの字状に開く。5は足高高台塊。高台はハの字状に開く。6は口縁部が強く外反し、口縁端部は短く摘み上げられる。7はやや上げ底気味の底部破片。10世紀前葉に比定される。

6）竪穴建物跡SI06（第22～24図）

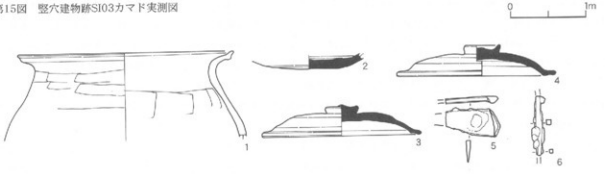
調査区の中央、A・B－9・10区に位置する。建物北東隅は未調査区域に広がり、中央部を斜めに縦断するように撹乱が入っている。立地する標高は35.17mのほぼ平坦部で、規模は南北軸長4.90m、東西軸長4.86mを測り、平面形は方形を呈する。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN－10°－Wを示す。床面はほぼ平坦で、床硬化面は柱穴間でとくにカマド前面がとくに顕著であった。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は9.5～35.7cmを測る。壁溝は東辺北側に一部掘削部が欠ける部分がみられる。規模は上面幅で13.5～28.5cm、深さ0.2～7.6cmの横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴が撹乱によって隠滅しているが4本柱に梯子穴が南壁辺中央に穿ってある。主柱穴北東側P1は径34.0×31.0cmの円形、深さ58.8cm。南東側P2は径59.0×35.0cmの楕円形、深さ78.9cm。南西側P3は径43.5×34.0cmの楕円形、深さ65.9cm。梯子穴P4は径28.0×27.0cmの円形、深さ14.0cm。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺中央に設置されているものの、北東側が撹乱を受けている。遺存状況は比較的良好である。北壁面を僅かに掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ86.0cm、検出された両袖間の最大幅91.0cm、袖部は灰白色粘土で構築されている。火床部は長81.0cm、幅50.0cm、深さ8.0cmの楕円形を呈し、摺鉢状に掘り込み、底面は被熱による赤化硬化している。カマド覆土は3層



第14図　竪穴建物跡SI03実測図



第15図　竪穴建物跡SI03カマド実測図

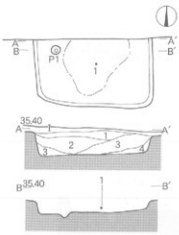


第16図　竪穴建物跡SI03出土遺物

に分層している。建物掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ６cm前後にわたり掘削していた。

遺物は土師器・坏、高坏、鉢、甕、甑、甕。土製品として球状土錘、粘土塊が出土している。

１・２は坏。１の口縁部は僅かに外反する。２の体部と底部の境に明瞭な陵をもつ。赤彩が施されている。４～６は高坏。４は体部と底部の境に陵を有し、口縁部が大きく開く。５・６は脚部破片。５はラッパ状に裾部が開く。



第17図　竪穴建物跡SI04実測図

第18図　竪穴建物跡SI04出土遺物

３・７・９・10は鉢。３は口縁部が僅かに開く。７は口縁部が外反する。12は平底の底部から体部は外傾して大きく開き、口縁部は外反気味となる。８は堆の底部破片。体部は外傾して開く。９・10は底部破片。11・13～15は甕。11は小型の甕。球形に近い体部から口頸部が立ち上がり、口端部で短く外反する。13は平底の底部から卵形の体部に移行し、口縁部は垂直気味に立ち上がる。口頸部は肥厚する。14の口縁部は大きく外反する。15は底部破片。体部が外傾して立ち上がる。15は球状土錘である。ほぼ球形を呈し、丁寧な造形である。幅3.02cm、高さ2.73cm、重量23.06g。17は粘土塊。現存の長さ8.24cm、最大幅6.65cm、最大厚3.85cm、重さ161.0gを測る。粘土を手で握り締めたように焼かれていた。断面長方形で、土製支脚としてみていたが、形状が不成形であり、支脚ではないであろう。これら出土遺物は６世紀後葉に比定される。

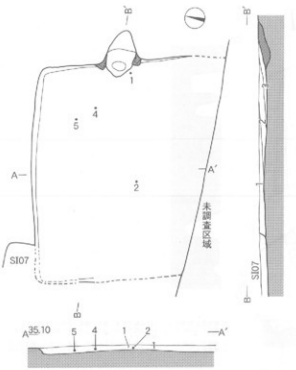
７）竪穴建物跡SI07（第25・26図）

調査区の東側、Ａ－11・12区に位置する。建物東側は竪穴建物跡SI05と重複し、南壁辺に撹乱を受けている。立地する標高は34.92mの平坦部で、規模は南北軸長3.41m、東西軸長2.80mを測り、平面形は方形を呈する。カマドの設置はないが、南北軸を主軸とすると方位はＮ－４°－Ｗを示す。床面は平坦で、明瞭な貼床構築がみられない。壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は4.0～24.5cmを測る。壁溝は構築されていない。柱穴は主柱穴が４本検出され、やや太めの隅柱穴と思われる。北西側Ｐ１は径50.0×45.5cmの円形、深さ39.7cm。北東側Ｐ２は径64.0×56.0cmの円形、深さ58.0cm。南東側Ｐ３は径49.0×49.0cmの円形、深さ42.5cm。南西側Ｐ４は径64.0×56.5cmの円形、深さ47.0cm。覆土は２層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

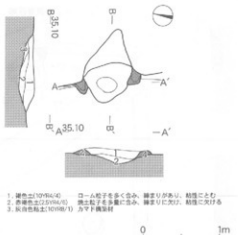
遺物は須恵器・甕の胴部破片。外面平行タタキ、内面青海波紋。本跡は８世紀代に比定される。

８）竪穴建物跡SI08（第27～29図）

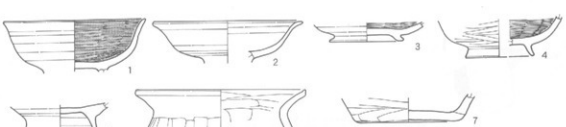
調査区の中央、Ｂ－９区に位置する。建物北東側および斜め中央を縦断するように撹乱が入っている。立地する標高は35.36mの平坦部で、規模は南北軸長6.75m、東西軸長6.73mを測り、平面形は方形を呈する。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はＮ－６°－Ｗを示す。床面は平坦で、明瞭な貼床構築がみられないが、床硬化面は建物柱穴間に認められ、とくにカマド前面から建物の中央部が顕著であった。壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は0.2～8.0cmを測る。壁溝は検出面で全周し、その規模は上面幅で15.0～43.0cm、深さ0.5～14.5cmの横断面Ｕ字状を呈する。柱穴は主柱穴４本と梯子穴１本の計５本穿ってある。北西側Ｐ１は径(69.5)×(65.0)cmの円形、深さ85.8cm。北東側Ｐ２は径52.0×51.0cmの円形、深さ69.3cm。南東側Ｐ３は径(54.0)×42.0　cmの楕円形、深さ77.8cm。南西側Ｐ４は径45.5×45.0cmの円形、深さ41.0cm。梯子穴Ｐ５は径57.5×43.5cmの楕円形、深さ29.6cm。覆土は３層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、北東側で撹乱を受け遺存状況はやや不良である。北壁面を検出面で45.0cm三角形状に掘り込んで煙道部としている。規模



第19図　竪穴建物跡SI05実測図



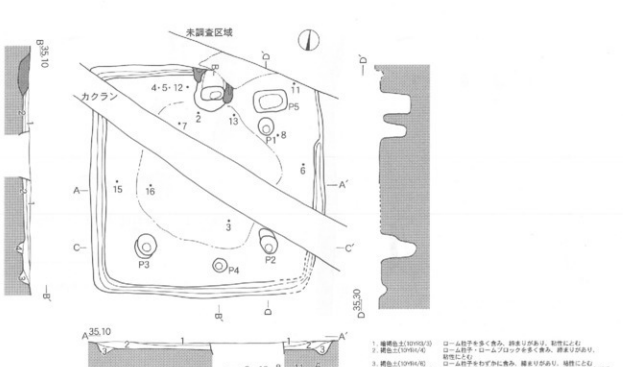
第20図　竪穴建物跡SI05カマド実測図



第21図　竪穴建物跡SI05出土遺物

は焚口部から煙道部までの長さ125.0cm、検出された両袖間の最大幅175.0cm、袖部は灰白色粘土で構築されている。火床部は長81.0cm、幅72.0cm、深さ12.0cmの楕円形を呈し、擂鉢状に掘り込み、底面は被熱による赤化硬化している。カマド覆土は２層に分層している。建物掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ４cm前後にわたり掘削していた。

遺物は土師器・甕。須恵器・坏、蓋、灰釉陶器・長頸瓶と土製品である球状土錘１点が出土している。１～３は土師器・甕である。１は口縁部が短く外反する。２・３は底部破片。４～９は須恵器。４～６は坏。４は口径に比して器高が低い。５・６の底部は回転ヘラケズリ。７～９は蓋。７は扁平のボタン状のツマミが付き、天井部が回転ヘラケズリで屈折して稜をなす。新治窯産。８・９は天井部が回転ヘラケズリで屈折して稜をなす。10は猿投窯産灰釉の長頸瓶の体部下部。流れ込み資料とみられる。11は球状土錘である。上下で押し潰したような扁平球形状で、幅



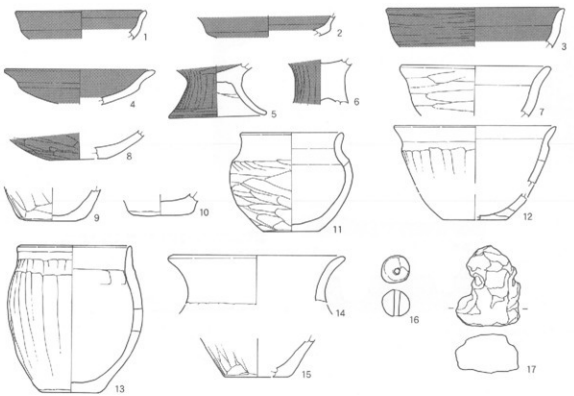
第22図　竪穴建物跡SI06実測図

第23図　竪穴建物跡SI06カマド実測図

2.06cm、高さ1.27cm、孔径0.71cm、重さ4.58gを測る。出土遺物のうち、10は9世紀後半、他はいずれも8世紀前葉に比定されており、本跡は8世紀前葉である。

9）竪穴建物跡SI09（第28～30図）

調査区の中央、A・B－8・9区に位置する。建物南側は約半分が未調査区域に広がっている。立地する標高は35.21mの平坦部で、規模は東西軸長5.69m検出された南北軸長3.08mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN－0°を示す。床面はほぼ平坦で、明瞭な貼床構築がみられないが、床硬化面はカマド前面がとくに顕著であった。壁面は垂直気味に立ち上がり、壁高は28.0～73.0cmを測る。



第24図　竪穴建物跡SI06出土遺物

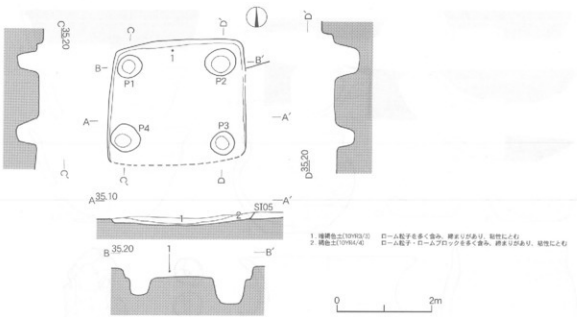
壁溝は構築されていない。柱穴は主柱穴２本のみ検出。北西側Ｐ１は径38.0×38.0cmの円形、深さ59.5cm。北東側Ｐ2は径39.0×32.0cmの楕円形、深さ51.5cm。Ｐ１と北壁辺に間仕切り溝が構築されている。長さ　138.0cm、幅25.0cm、深さ15.0cmを測る。覆土は３層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺中央に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を35.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ159.0cm、検出された両袖間の最大幅112.0cm、袖部は灰白色粘土で構築されている。火床部は長110.0cm、幅72.0cm、深さ21.0cmの楕円形を呈し、摺鉢状に掘り込み、底面は被熱による赤化硬化している。カマド覆土は２層に分層できる。

建物掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ４cm前後にわたり掘削していた。

遺物は土師器・坏、高坏、坩、鉢、甕が出土している。１～３は坏である。１の口縁部は屈折して端部は短く外反する。２・３は体部との境に明瞭な稜をもち、口縁部は垂直気味に立ち上がる。いずれも赤彩が施されている。４・５は高坏。４の坏部は外傾して開く。５は脚部でラッパ状に裾部が開く。６は坩。球形に近い体部に口縁部が外反する口頸部が付く。７・８は鉢で、内湾気味に開く体部に、口縁部はさらに外反して立ち上がる。９は壺。扁平球形の体部に外反気味の口頸部が付く。10～12は甕で、10は口縁部が外傾して立ち上がる。11～13は底部破片。11・12は木葉痕が残置する。本跡は６世紀後半に比定できる。

10）竪穴建物跡SI10（第33・34図）

調査区の西側、Ｃ・Ｄ－６区に位置する。建物西側大半が未調査区域に広がっている。立地する標高は35.84mの平坦部で、規模は南北軸長7.26m、検出された東西軸長1.45mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されているものとすると、主軸方位はＮ－37°－Ｗを示す。床面は平坦で、明瞭な貼床構築がみられない。壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は30.0～31.0cmを測る。壁溝は検出面で全周し、その規模は上



第25図　竪穴建物跡SI07実測図

第26図　竪穴建物跡SI07出土遺物

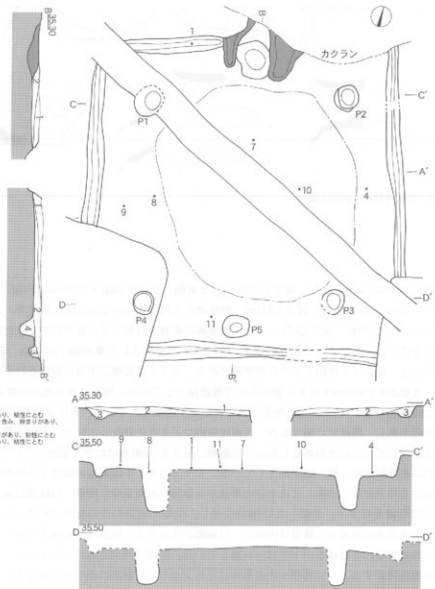
面幅で13.0～38.0cm、深さ5.0～7.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は南東側主柱穴1本が確認できるだけである。P 1は径76.0×72.0cmの円形、深さ79.0m。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは検出できていない。

建物掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ4cm前後にわたり掘削していた。

遺物として土師器・坏、埦。須恵器・蓋が出土している。1は土師器・坏。丸底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。内面ヘラミガキ。2は埦。体部は内湾気味に立ち上がる。内面スジヘラミガキ。3・4は須恵器・蓋。3は扁平のボタン状のツマミが付き、天井部が回転ヘラケズリ。4は天井部が回転ヘラケズリで扁折して稜をなす。天井部は回転ヘラケズリ。本跡は8世紀前葉に比定される。

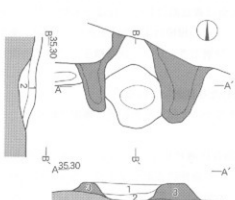
11）竪穴建物跡SI11（第35～37図）

調査区の西側、D・E－5・6区に位置する。建物北東隅が未調査区域に広がっており、また建物中央を斜めに縦断するように撹乱が入っている。立地する標高は35.56mのほぼ平坦部で、規模は南北軸長5.66m、検出された東西軸長5.71mを測り、平面形は方形を呈する。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN－10°－Wを示す。床面はほぼ平坦で、明瞭な貼床構築がみられないが、床硬化面はカマド前面から建物の中央部がとくに顕著であった。壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は13.0～53.5cmを測る。壁溝は検出面で全周し、その規模は上面幅で10.0～28.0cm、深さ2.0～7.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴4本と梯子穴1本の計5本穿ってある。北西側P



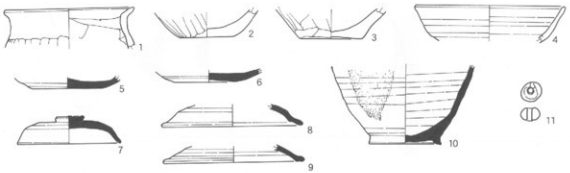
1. 暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒子を多く含み、締まりがあり、粘性にとむ
2. 褐色土(10YR4/4)　ローム粒子・ロームブロックを多く含み、締まりがあり、粘性にとむ
3. 黒褐色土(10YR3/1)　ローム粒子をわずかに含み、締まりがあり、粘性にとむ
4. 黒褐色土(10YR2/2)　ローム粒子を多く含み、締まりがあり、粘性にとむ

第27図　竪穴建物跡SI08実測図



1. 赤褐色土(2.5YR4/6)　焼土粒子を多く含み、締まりがあり、粘性にとむ
2. 暗赤褐色土(2.5YR3/3)　焼土粒子を多量に含み、締まりにかけ、粘性に欠ける
3. 灰白色粘土(10YR8/1)　カマド構築材

第28図　竪穴建物跡SI08カマド実測図



第29図　竪穴建物跡SI08出土遺物

1は径37.0×30.0cmの円形、深さ112.0cm。北東側Ｐ２は径38.0×35.0cmの円形、深さ85.9cm。南東側Ｐ３は径(42.0)×30.0cmの楕円形、深さ88.0m。南西側Ｐ４は径33.0×25.0cmの楕円形、深さ66.3cm。梯子穴Ｐ５は径28.5×25.0cmの円形、深さ13.5cm。また南東隅に東西を長軸とする長方形を呈した貯蔵穴が設置してある。西側が撹乱を受けているものの、その規模は南北軸71.0cm、検出された東西軸(72.2)cm、深さ51.4cmを測る。覆土は５層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺中央に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を19.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ112.0cm、検出された両袖間の最大幅99.0cm、袖部は灰白色粘土で構築されている。火床部は長51.0cm、幅74.0cm、深さ12.0cmの楕円形を呈し、擂鉢状に掘り込み、底面は被熱による赤化硬化している。カマド覆土は２層に分層している。建物掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ７cm前後にわたり掘削していた。

遺物は土師器・坏、鉢、甕が出土している。１～３は坏。１は丸底の底部から体部は内湾気味に開き、口縁部は垂直気味に立ち上がる。赤彩。２は小径の平底から体部は内湾気味に開き、口縁部は垂直気味に立ち上がる。体部との境に明瞭な陵を有する。赤彩。３は塊状を呈し、丸底の底部から口縁部はわずかに外反する。黒色処理。４は鉢。やや上げ底気味の底部から体部は内湾し、口縁部が外反する。底部に木葉痕を残置する。４～８は甕。４は口縁部が大きく外反する。５は体部の下半部が欠損している。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。底部に木葉痕を残置する。６は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。７は体部下半部。内湾気味に立ち上がる。これら出土遺物は６世紀後葉に比定される。

12）竪穴建物跡SI12（第38図）

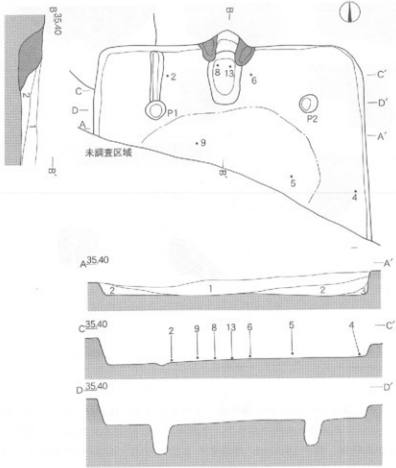
調査区の西側、Ｄ・Ｅ－５区に位置する。建物南東壁辺のみ検出され、大半が未調査区域に広がっている。立地する標高は35.76mの平坦部で、規模は検出された南北軸長3.71m、東西軸長0.73mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。主軸を南北軸とすると方位はＮ－41°－Ｗを示す。床面は確認面においてはほぼ平坦である。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は5.0cmを測る。壁溝は検出面で全周し、その規模は上面幅で8.0～16.0cm、深さ1.5cmの横断面Ｕ字状を呈する。柱穴は検出できなかった。覆土は３層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは確認できなかった。

建物掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ４cm前後にわたり掘削している。

遺物は図示できるものはなく、わずかに土師器破片が出土するのみであるが、本跡は８世紀代に推定される。

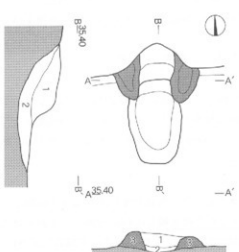
13）竪穴建物跡SI13（第39～41図）

調査区の西側、Ｅ－５区に位置する。建物北東側および南西側は未調査区域に広がっている。立地する標高は35.94mのほぼ平坦部で、規模は南北軸長4.16m、東西軸長3.26mを測り、平面形は方形を呈する。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はＮ－36°－Ｗを示す。床面は平坦で、床硬化面は柱穴間でみられ、とくにカマド前面から建物の中央部がとくに顕著であった。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は2.0～25.0cmを測る。壁溝は検出面



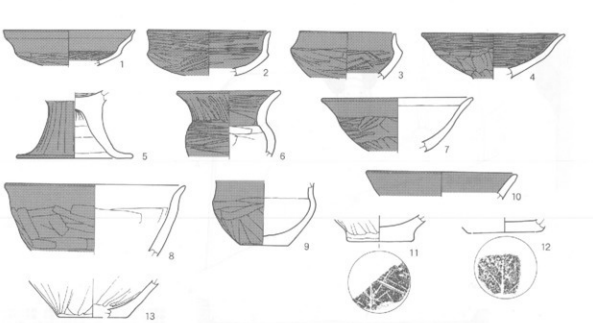
1. 暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒子を多く含み、締まりがあり、粘性にとむ
2. 暗褐色土(10YR3/4)　ローム粒子を多く含み、締まりがあり、粘性にとむ
3. 黒褐色土(10YR3/1)　ローム粒子をわずかに含み、締まりがあり、粘性にとむ

第30図　竪穴建物跡SI09実測図



1. 赤褐色土(2.5YR4/6)　焼土粒子を多く含み、締まりがあり、硬性にとむ
2. 暗赤褐色土(2.5YR3/3)　焼土粒子を多量に含み、締まりに欠け、粘性に欠ける
3. 灰白色粘土(10YR8/1)　カマド構築材

第31図　竪穴建物跡SI09カマド実測図



第32図　竪穴建物跡SI09出土遺物

で全周し、その規模は上面幅で10.0～21.0cm、深さ3.0～7.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴３本が確認でき、南西側の１本が未調査区域にあることから本来は４本柱であろう。北西側Ｐ１は径53.0×46.0cmの円形、深さ51.0cm。北東側Ｐ２は径47.0×42.0cmの円形、深さ18.5cm。南東側Ｐ３は径60.0×42.0cmの楕円形、深さ27.5m。また北東隅側に東西に長い長方形の貯蔵穴が設置してある。東西軸60.0cm、南北軸53.5cm、深さ35.0cmを測る。覆土は３層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を35.0cm三角形状に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ112.0cm、検出された両袖間の最大幅69.0cm、袖部は灰白色粘土で構築されている。火床部は長65.0cm、幅39.0cm、深さ8.0cmの楕円形を呈し、擂鉢状に掘り込み、底面は被熱による赤化硬化している。カマド覆土は３層に分層できた。

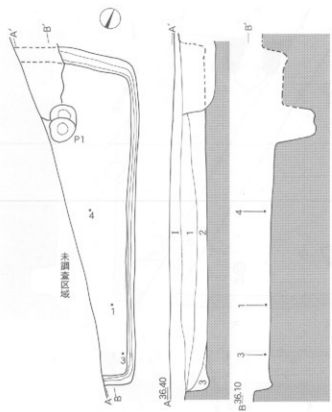
建物掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ４cm前後にわたり掘削していた。

遺物は土師器・坏、甕が出土している。

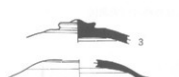
１～７は坏。１はやや大型の坏で、丸底の底部から体部は内湾気味に開き、口縁部は内傾気味に立ち上がる。２は丸底で、体部との境に稜を有する。３～７は体部と口縁部との境に明瞭な稜をもたないもので、丸底の底部から口縁部は短く垂直気味に立ち上がる。８～10は甕。８は内湾気味の体部から口縁部が外反する。頸部が肥厚する。９・10は底部破片。これら出土遺物は６世紀後葉に比定される。

14）竪穴建物跡SI14（第28～30図）

調査区の西側、Ｅ・Ｆ－４区に位置する。建物東壁辺側が未調査区域に広がり、西側が撹乱溝によって縦断している。立地する標高は35.74mの平坦部で、規模は東西軸長5.03m、検出された南北軸長4.45mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はＮ－39°－Ｗを示す。床面はほぼ平坦で、明瞭な貼床構築がみられないが、床硬化面はカマド前面から建物の中央部がとくに顕著であった。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は17.0～30.0cmを測る。壁溝は北壁辺西側、西壁辺北側に掘削されており、その規模は上面幅で11.0～25.0cm、深さ4.0～5.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴３本が確認でき、南西側の１本が未調査区域にあることから本来は４本柱であろう。北西側Ｐ１は径28.0×27.0cmの円形、深さ54.5cm。北東側Ｐ２は径31.0×30.0cmの円形、深さ57.0cm。南東側Ｐ３は径30.0×29.0cmの円形、深さ66.5m。また北西隅側に東西に長



第33図　竪穴建物跡SI10実測図

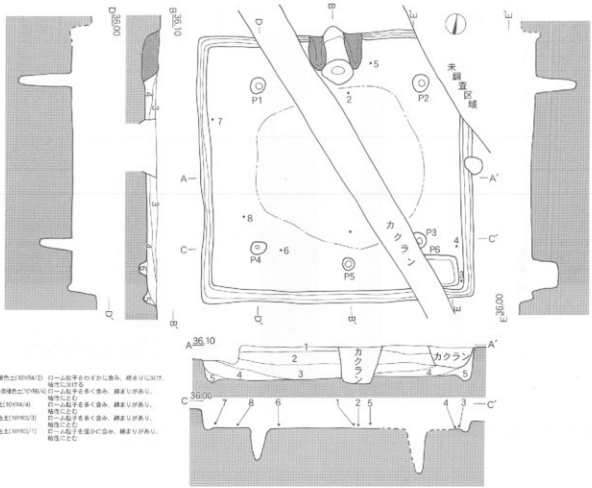


第34図　竪穴建物跡SI10出土遺物

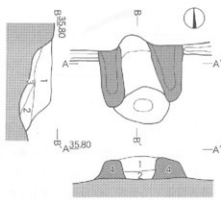
い長方形を呈した貯蔵穴が設置されており、東西軸83.0cm、南北軸63.0cm、深さ47.8cmを測る。覆土は３層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺やや西寄りに設置されており、遺存状況は良好である。北壁面を18.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ122.0cm、検出された両袖間の最大幅81.0cm、袖部は灰白色粘土で構築されている。火床部は長88.0cm、幅58.0cm、深さ18.0cmの楕円形を呈し、擂鉢状に掘り込み、底面は被熱による赤化硬化している。カマド覆土は３層に分層している。建物掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ６cm前後にわたり掘削していた。

遺物は土師器・短頸壺、甕が出土している。１・２は短頸壺。やや扁平の体部から口縁部はわずかに外反する。体部および内面口縁部に赤彩が施されている。３は甕。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。外面に赤彩が施される。６世紀後葉に比定される。

15）竪穴建物跡SI15（第45・46図）

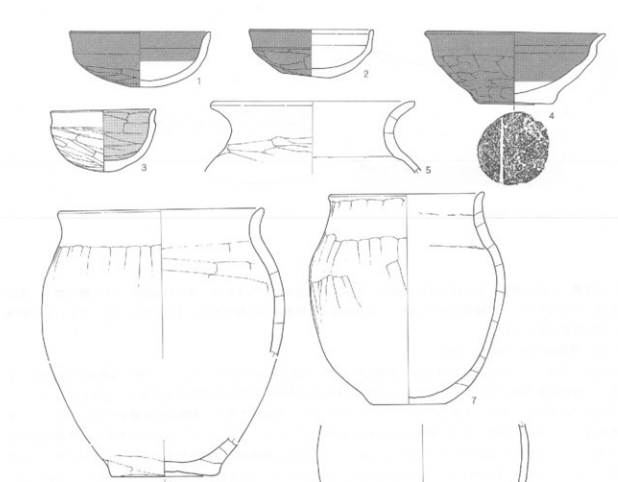


第35図　竪穴建物跡SI11実測図



第36図　竪穴建物跡SI11カマド実測図

調査区の中央、C－8区に位置する。建物北東側が未調査区域に広がっている。立地する標高は35.91mの平坦部で、規模は南北軸長4.23m、検出された東西軸長3.25mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは貯蔵穴あるいは梯子穴の位置関係から東壁辺にされているものと推定すると、主軸方位はN－58°－Eを示す。床



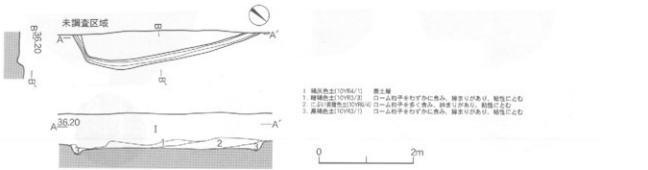
第37図　竪穴建物跡SI11出土遺物

面はほぼ平坦で、床硬化面は建物中央部がとくに顕著であった。壁面は外傾して立ち上がり、壁高は7.0～30.0cmを測る。壁溝は掘削されていない。柱穴は３本が確認でき、うち２本が主柱穴で北側の２本が未調査区域にあることから本来は４本柱であろう。また１本は梯子穴である。南東側Ｐ１は径21.0×20.0cmの円形、深さ34.5cm。南西側Ｐ２は径31.0×26.0cmの楕円形、深さ44.8cm。梯子穴Ｐ３は径21.0×21.0cmの円形、深さ22.5m。また建物北東隅側に東西軸を長軸とする長方形の貯蔵穴が設置してある。規模は東西軸93.0cm、南北軸65.0cm、深さ33.5cmを測る。覆土は３層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは確認できなかった。北東壁辺に設置されているものと推定する。

建物掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ４cm前後にわたり掘削している。

遺物は土師器・坏、甕が出土している。

１・２は坏。1は平底気味の底部から体部は内湾し、口縁部は内傾して立ち上がる。体部との境に明瞭な陵をもつ。２もやはり平底気味の底部から体部は扁平気味に開き、口縁部は垂直に立ち上がる。体部との境に明瞭な陵を有する。



第38図　竪穴建物跡SI12実測図

3～5は甕。3は小型で、上げ底気味の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。4は口縁部が大きく開く甕で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は大きく開く。5は内湾する体部から口縁部がくの字状に外反する。これら出土遺物は6世紀後葉に比定される。

16）竪穴建物跡SI16（第47～49図）

調査区の西端、D－2・3区に位置する。建物南側半分が未調査区域に広がっている。立地する標高は36.06mの平坦部で、規模は東西軸長4.20m、検出された南北軸長1.87mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN－37°－Wを示す。床面は平坦で、明瞭な貼床構築がみられないが、床硬化面はカマド前面に確認できる。壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は20.5～27.0cmを測る。壁溝は検出面で全周し、その規模は上面幅で17.0～24.0cm、深さ1.0～8.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は北側主柱穴2本が検出できた。北西側P1は径41.0×36.0cmの円形、深さ48.0cm。北東側P2は径28.0×27.0cmの円形、深さ36.8cm。覆土は6層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺中央に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を12.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ102.0cm、検出された両袖間の最大幅92.0cm、袖部は灰白色粘土で構築されている。火床部は長98.0cm、幅55.0cm、深さ11.0cmの楕円形を呈し、掘鉢状に掘り込み、底面は被熱による赤化硬化している。カマド覆土は2層に分層している。

建物掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ4cm前後にわたり掘削していた。

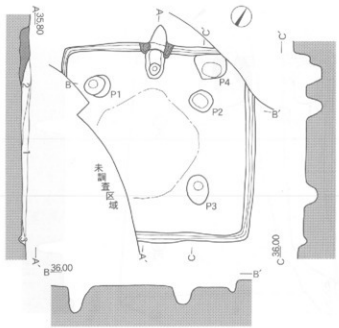
遺物は土師器・高坏、甕が出土している。1は高坏。脚部下部が欠損している。坏部は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反して開く。体部との境に明瞭な陵を有する。2・3は甕。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は大きく外反して開く。これら出土遺物は6世紀後葉に比定される。

17）竪穴建物跡SI17（第50・51図）

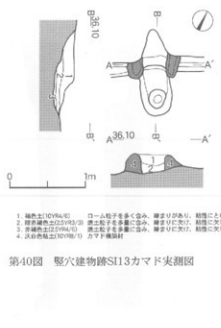
調査区の西端、D・E－2・3区に位置する。建物西側の大半が未調査区域に広がっている。立地する標高は35.94mの平坦部で、規模は東西軸5.91m、検出された南北軸長1.20mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。主軸方位は南北軸とするとN－32°－Wを示す。床面は平坦で、明瞭な床硬化面は確認できなかった。壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は23.5cmを測る。壁溝は東壁辺、南壁辺東側で検出でき、その規模は上面幅で14.0～25.0cm、深さ23.5～26.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴1本のみで、南東側P1は径41.0×39.5cmの円形、深さ98.2cm。覆土は4層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは確認できなかった。

建物掘形底面はわずかに起伏があるものの、全面的に深さ4cm前後にわたり掘削していた。

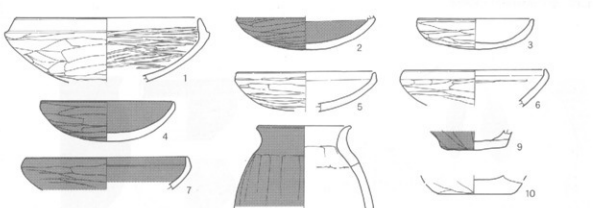
遺物は土師器・坏、甕が出土している。1～3は坏。1は丸底の底部から体部は内湾気味に開き、口縁部は垂直に立ち上がる。2は丸底の底部から体部は内湾して開き、口縁部は短く内傾する。3は底部破片。丸底を呈し、外面が砥石として再利用されている。筋状砥石として刃部の研磨に使用したものと推定する。4～7は甕である。4は球形



第39図　竪穴建物跡SI13実測図



第40図　竪穴建物跡SI13カマド実測図



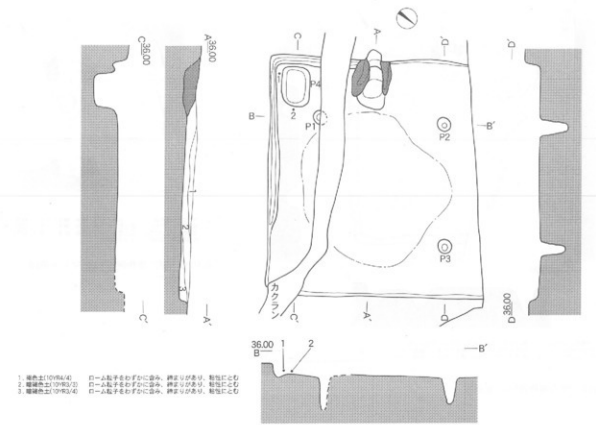
第41図　竪穴建物跡SI13出土遺物

の体部に口縁部はくの字状に外反する。５は小型の甕。内湾気味の体部は立ち上がり、口縁部はくの字状に開く。６～８は底部破片。いずれも平底である。これら出土遺物は６世紀後葉に比定される。

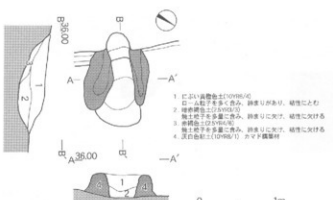
第５節　掘立柱建物跡

１）掘立柱建物跡SB01（第52図）

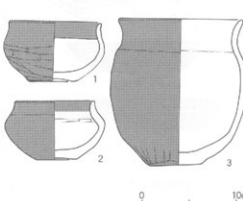
調査区西側、Ｅ－５・６区の竪穴建物跡SI11(６世紀後葉)に重複し、本跡が新期である。規模は桁行２間×梁行１



第42図　竪穴建物跡SI14実測図

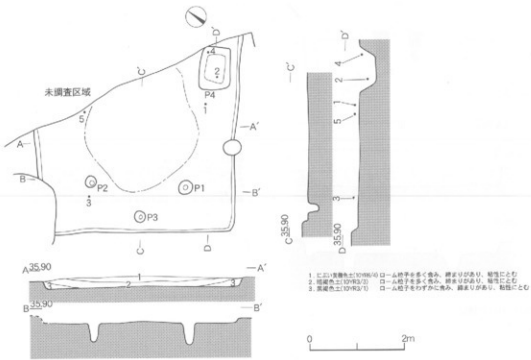


第43図　竪穴建物跡SI14カマド実測図

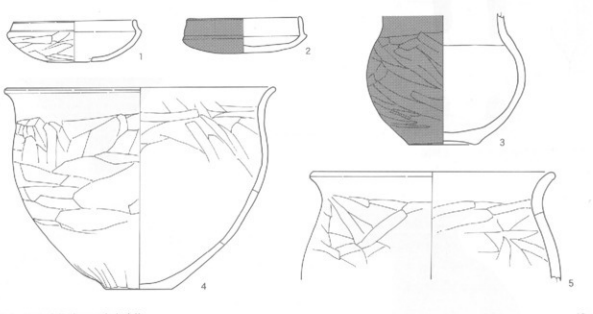


第44図　竪穴建物跡SI14出土遺物

間で、主軸方位はN－88°－Eを示す。桁間は1.40～1.70m、梁間は2.96mと2.98mの間隔である。柱穴は6本検出され、径34.0～51.0cm、深さ14.3～36.6cmである。出土遺物はないが、掘形が比較的簡素であることから古代から中世以降と推定される。



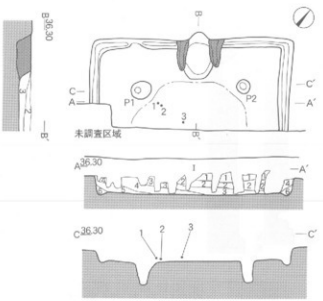
第45図　竪穴建物跡SI15実測図



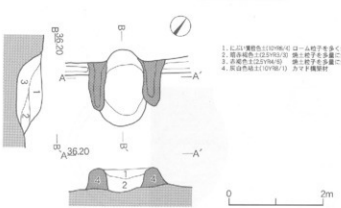
第46図　竪穴建物跡SI15出土遺物

表２　柱穴計測値（単位cm）

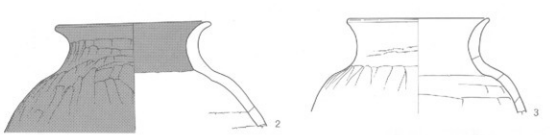
	長径 × 短径	深さ	形		長径 × 短径	深さ	形		長径 × 短径	深さ	形
P1	43.0 × 36.0	36.6	楕円	P2	40.0 × 30.0	36.0	楕円	P3	49.0 × 41.0	14.3	楕円
P4	51.0 × 47.0	25.3	隅丸方	P5	37.0 × 33.0	—	楕円	P6	34.0 × 32.0	33.0	円



第47図　竪穴建物跡SI16実測図



第48図　竪穴建物跡SI16カマド実測図

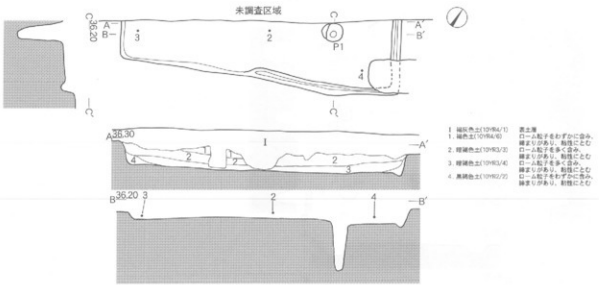


第49図　竪穴建物跡SI16出土遺物

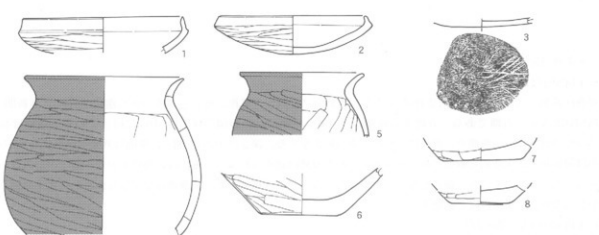
第6節　土坑（第53図）

1）土坑SK01

調査区西側、A－12区、竪穴建物跡SI05カマド前面に位置し、本跡が新期である。立地する標高は34.68m。規模は長径62.0cm、短径53.5cmを測り、南北にやや長い楕円形を呈する。深さ20.8cmを測り、壁面はほぼ垂直気味に



第50図　竪穴建物跡SI17実測図

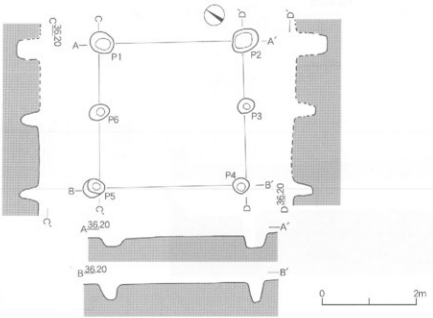


第51図　竪穴建物跡SI17出土遺物

立ち上がる。底面は平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は２層に分層でき、埋め戻し土層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して中世以降と推定する。

２）土坑SK02A（第53図）

調査区西側、A－12区、竪穴建物跡SI05カマド前面に位置し、重複土坑で、本跡が竪穴建物跡SI05および土坑SK02Bより新期である。立地する標高は34.65～34.67mを測る。規模は長径93.5cm、短径61.0cmを測り、南北にやや長い楕円形を呈する。深さ46.3cm、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は図示できなかったが、須恵器の小破片２点出土。覆土の締りの状況から判



第52図　掘立柱建物跡SB01実測図

断して中世以降と推定する。

3）土坑SK02B（第53図）

調査区西側、A－12区、竪穴建物跡SI05カマド前面に位置し、重複土坑で、本跡が竪穴建物跡SI05より新期で、土坑SK02Aより古期である。立地する標高は34.66mを測る。南西側で住居跡SI01に接している。規模は長径67.5cm、短径63.5cmを測り、東西にやや長い楕円形を呈する。深さ22.0cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は鍋底状で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して中世以降と推定する。

4）土坑SK03A（第53図）

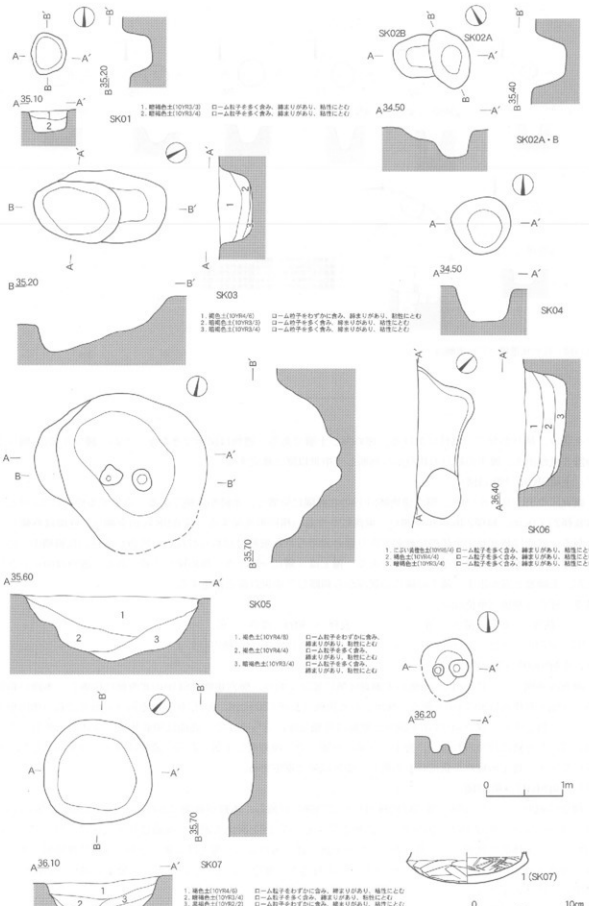
調査区西側、A－11区に位置し、重複土坑で本跡が新期である。立地する標高は34.50m。西側で竪穴建物跡SI07に隣接している。規模は長径134.0cm、短径90.0cmを測り、東西に長い楕円形を呈する。深さは25.3cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は鍋底状で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は3層に分層でき、埋め戻し土層である。遺物は縄文土器と土師器破片の2点。しかし、覆土の締りの状況から判断して中世以降と推定する。

5）土坑SK03B（第53図）

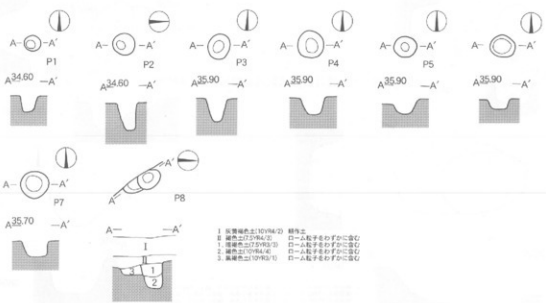
調査区西側、A－11区に位置し、重複土坑で本跡が古期である。立地する標高は35.0m。西側で竪穴建物跡SI07に隣接している。規模は長径106.0cm、短径76.0cmを測り、東西に長い楕円形を呈する。深さ56.7cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は鍋底状で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層の埋め戻し土層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して中世以降と推定する。

6）土坑SK04（第53図）

調査区西側、A－12区。竪穴建物跡SI05とSI07の境に位置し、本跡が新期である。立地する標高は34.65m。規模は長径88.0cm、短径89.5cmの円形を呈する。深さ46.6cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロッ



第53図　土坑SK01～08実測図、SK07出土遺物



第54図　柱穴状遺構（P）実測図

0　1m

クを含み、締りがなく、粘性に欠ける。埋め戻し土層である。遺物は図示できなかったが、縄文土器(中期)1点、土師器3点が出土。覆土の締りの状況から判断して中世以降と推定する。

7）土坑SK05（第53図）

調査区中央、B－8・9区。竪穴建物跡SI09の北西隅に位置し、本跡が新期である。立地する標高は35.44m。規模は長径277.0cm、短径246.0cmを測り、東西にやや長い楕円形を呈する。深さ98.7cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は鍋底状で全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。底面から柱穴状遺構(P=ピット)2本が穿ってある。規模は下記のとおりである。覆土は3層に分層でき、埋め戻し土層である。遺物は図示できなかったが、土師器2点が出土。覆土の締りの状況から判断して中世以降と推定する。

表3　柱穴計測値（単位cm）

	長径 × 短径	深さ	形		長径 × 短径	深さ	形
P1	27.0 × 23.0	13.5	円	P2	39.0 × 31.0	22.0	楕円

8）土坑SK06（第53図）

調査区西側、C・D－6区。南側が未調査区域に延びており、竪穴建物跡SI10の北西側に位置し、本跡が新期である。立地する標高は35.78mを測る。検出される規模は長径130.0cm、短径70.0cmを測り、南北に長い楕円形を呈するものと推定する。深さ45.0cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は鍋底状で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は3層に分層でき、埋め戻し土層である。遺物は図示できなかったが、土師器6点が出土。覆土の締りの状況から判断して中世以降と推定する。

9）土坑SK07（第53図）

調査区中央、C－7・8区。竪穴建物跡SI15の北西隅に位置し、本跡が新期である。立地する標高は35.51m。規模は長径167.0cm、短径162.5cmを測り、円形を呈する。深さ61.3cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は鍋底状で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は5層に分層でき自然堆積層である。遺物は土師器・坏が1点出土。おそらくSI15からの流れ込みと推定される。したがって、覆土の締りの状況から判断して中世以降と推定する。

10）土坑SK08（第53図）

調査区西側、Ｅ－３区に位置し、立地する標高は35.83m。北東側で竪穴建物跡SI17に隣接している。規模は長径95.0cm、短径84.0cmを測り、円形を呈する。深さ15.3cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は緩底状で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。底面に柱穴が２本穿ってある。計測は下記のとおり。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。覆土の締りの状況から判断して中世以降と推定する。

表４　柱穴計測値（単位cm）

	長径 × 短径	深さ	形		長径 × 短径	深さ	形
P1	19.0 × 19.0	13.0	円	P2	29.5 × 26.0	12.5	円

第７節　柱穴状遺構（ピット）（第54図）

本調査区全域にいわゆるピットと呼称される柱穴状遺構(以下ピットと呼ぶ)が検出された。調査されたピットの総数は８基で、形状からみるといずれも円形もしくは楕円形を呈している。また規模についてみると全体的にかなり纏まりがみられ径60cmを最大径、径26cmを最小径とし、また深さについても最大深度42.5cm、最小深度11.8cmである。これらの平均値は径38.6cm、深さ26.2cmとなり、そのｔ５cm幅に収まるピットが全体の75％を占め、結果的に径30～40cm、深さ25～35cmの円形ピットが最も多いということになる。なお、これらはいずれも間尺に合うものはなく、しかも覆土中より遺物の出土はなかったため、その性格については明瞭ではない。少なくとも埋土は黒色土で覆われていたこと、円形もしくは楕円形でほぼ垂直気味に落ち込んでいたことから単独もしくは複数が組み合わさって何らかの機能をもった構造物の存在が想定される。小屋や物置などの粗雑で貧弱な柱構造の建物あるいは棚状構造物、物干し杭などの柱あるいは杭跡等が考えられるがいずれもこれといった決定的な痕跡を検証することができなかった。そこで、今回検出されたすべてのピットを計測し、一覧表に掲げた。

表５　柱穴計測値（単位cm）

	長径 × 短径	深さ	形		長径 × 短径	深さ	形		長径 × 短径	深さ	形
P1	26.0 × 25.0	23.5	円	P2	34.0 × 32.0	42.5	円	P3	40.0 × 35.0	34.3	円
P4	43.0 × 39.0	26.0	円	P5	37.0 × 32.0	15.8	円	P6	37.0 × 34.0	11.8	円
P7	42.0 × 42.0	23.5	円	P8	60.0 ×(26.0)	32.5	楕円				

（小川和博）

第3章　まとめ

今回実施した上ノ塙遺跡は、北浦に注ぐ蔵川左岸の舌状台地上に立地している古墳時代から平安時代にかけて形成された集落跡である。いまでこそ北浦まで2.5kmほどの距離があるが、当時は眼下まで北浦に覆われていたものと推定される。こうした環境の下当然周囲では縄文時代から人々の生活の場に事欠かないことはいうまでもない。今日までゴルフ場以外に大きな開発はなく、まだ周辺遺跡の実態を十分に把握仕切れていない部分も多いものの、ここ蔵川左岸側は市内でも稀にみる遺跡密集地として知られている(茂木他1997)。とくに本遺跡から東方へ約1km強に位置する出津平遺跡を拠点の集落の中心にその周辺遺跡として仲峰遺跡および本遺跡が所在し、主従関係にある共時態を維持する。この出津平遺跡では竪穴建物跡140軒が検出され、22軒の6世紀後葉の集落が形成され、8世紀前葉でも15軒の竪穴建物跡が確認されている(川井他2002)。

さて、今回の調査は道路改良工事に伴う発掘調査であり、現行の生活道路として使用していることなどからその対象範囲を含め、調査の進め方においてかなり限定されたものがあった。なかでも1軒の竪穴建物跡の調査では2回に分けて行う例が4軒、しかも検出された17軒の竪穴建物跡すべて調査区外に至るもので、完掘建物は皆無であった。こうした悪条件にもかかわらず、出土遺物のまとまりから十分評価できる成果が期待できた。ここでは各時期における問題点を探りながらまとめとしてみたい。

竪穴建物跡は17軒が検出された。うちSI01とSI12の2軒は大半が調査区外に延びており、報文中に触れたとおり出土遺物を含め全容を掌握できてはいない。そこで残り15軒についてその在り方について検討する。まず竪穴建物跡の時期決定については、より竪穴建物床面に近い層位中の遺物を抽出し廃絶時期としたが、より新しい時期の混入が認められるにもかかわらずその段階を廃絶時期として判断できない場合があった。竪穴建物跡SI08において覆土中に単独出土した例である。時期決定の困難さが露呈した一例といえよう。

さて取り敢えず出土した土器の年代により判断すると6世紀中～後葉、8世紀前葉、10世紀代の大きく3時期の画期がみられる。簡単に概観のため下記のとおり一覧表を掲げた。

建物番号	平面形	規模(南北×東西m)	主軸方位	カマド位置	柱穴数	時期
SI02	正方形	3.97×4.21	N－19°－W	北壁	主4・梯1	8c前
SI03	正方形	(3.55)×3.77	N－03°－W	北壁	主4・梯1	8c前
SI04	正方形	(1.43)×2.50	N－87°－W	不明	梯1？	10c
SI05	正方形	(3.75)×4.56	N－15°－W	北壁	0	10c
SI06	正方形	4.90×4.86	N－10°－W	北壁	貯1・主3(4)・梯1	6c後
SI07	正方形	3.41×2.80	N－04°－W	なし	隅柱4	8c(?)
SI08	正方形	6.75×6.73	N－06°－W	北壁	主4・梯1	8c前
SI09	正方形	(3.80)×5.69	N－0°	北壁	主2(4)	6c中
SI10	正方形	7.26×(1.45)	N－08°－W	不明	主1(4)	8c前
SI11	正方形	5.66×5.71	N－10°－W	北壁	貯1・主4・梯1	6c中
SI13	正方形	4.16×3.26	N－36°－W	北壁	貯1・主3(4)	6c後
SI14	正方形	(4.45)×5.03	N－39°－W	北壁	貯1・主3(4)	6c中
SI15	正方形	4.23×(3.25)	N－58°－W	(北壁)	貯1・主2(4)・梯1	6c後
SI16	正方形	(1.87)×4.20	N－37°－W	北壁	主2(4)	6c後
SI17	正方形	(1.20)×5.91	N－32°－W	北壁	不明	6c後

従来から検討されてきた竪穴建物跡の属性として、出土遺物だけではなく、建物の形態・構造・規模・主軸方位・カマド構造など多くの属性の類似性が認められれば、同時存在の可能性は高まるはずといわれて久しい(土井・渋江1987)。しかし、土器編年が精緻にわたる今日、しかも検出例の多さから居住形態のみかけの類似性だけの状況証拠では解決できない問題も多出していることもまた確かである。今回検出された17軒の竪穴建物跡をみると、まず6世紀後葉に比定されるものが8軒ある。いずれも完掘できてはいないため、カマド、柱穴あるいは貯蔵穴の有無等の

属性について比較することはできないが、基本的に規模からみるとSI09、11、17が一辺5.5～6.0mの中型に属し、他は5.0m前後から4.0mの間に含まれるやや小型の竪穴建物跡である。一般に主柱穴の数は竪穴の規模に比例するといわれているものの、確認できるものは、建物の規模に関わらず４本主柱穴と１本梯子穴に貯蔵穴が設置されている。これらの属性は本遺跡における共時態を窺わせる。なお、貯蔵穴の設置位置が異なる大きな違いがみられるものの、それが直接時期差を意味していることはないであろう。さて、竪穴建物跡の廃棄時期を判断させたものが出土遺物である。いずれもまとまった出土状態を示しており、とくに坏の存在が大きい。県内におけるいわゆる「鬼高式土器」の研究は樫村宣行・浅井哲也氏をはじめ(樫村・浅井1992)、(財)茨城県教育財団における大きな成果が提示されている(吹野1994他)。それらを参考にまず６世紀中葉(樫村編年Ⅲ－Ⅳ期)としてSI09・SI11・SI14が相当する。次いで６世紀後葉(樫村編年Ⅳ期)としてSI06・SI13・SI15・SI17が相当する(樫村1992)。

次の画期が８世紀前葉である。８世紀代では５軒確認でき、うち４軒が確実に前葉に比定できる。SI02、SI03、SI08、SI10である。なかでもSI10を除く３軒はその全容が把握可能である。先の６世紀代の竪穴建物跡と形状的に酷似しており、その差は貯蔵穴の有無である。SI02とSI03は一辺４m前後の小型竪穴建物であるが、４本主柱穴に１本梯子穴が伴う。またSI08は一辺6.75mの竪穴建物跡であり、完掘できなかったSI10では今回の調査で最も規模の大きな一辺７mを超えるものである。ここでも廃棄時期を判断したものが出土遺物である。いずれも共通した出土を示しているのが、坏Ｂ蓋と呼称されている須恵器である(安田他1982)。SI02・03・08・10のいずれからも検出されており、ボタン状のツマミが付き、天井部は回転ヘラケズリで整形されている。大半が新治窯産で８世紀第１四半期に比定されている。なお、SI03出土のうち第16図３は若干新期であるとのご教示をいただいた(注１)。またSI08出土土器のうち第30図10の灰釉陶器(猿投窯産)は９世紀後半に比定されている。他の覆土出土はいずれも８世紀前葉であり、竪穴建物の廃棄時期が100年以上の差がでている。撹乱溝に接して出土していることから混入品ではないかと推定している。同じくSI07も出土遺物から８世紀代の須恵器・甕の胴部破片が検出された。本跡は重複建物であり、撹乱の激しいところから混入品の可能性が高く、８世紀代廃棄との判断は疑問である。

最後に10世紀代の竪穴建物跡が２軒比定されている。SI04とSI05である。この二者は形態的に大きな差異があり、同時存在も否定的である。

以上のように竪穴建物跡の廃棄時期について判断したが、なかでも６世紀中葉から後葉に継起した８軒はまとまっている。検出箇所も調査区中央から西側に分布しており、集落が西側の台地平坦面に広がっていることを示唆している。逆に８世紀代は中央から東側にまとまりを示しており、東側の緩傾斜面に集落の移動がみられる。全体を調査したわけではないが、時期ごとに群として住み分けが行われていた可能性がある。ここ上ノ境遺跡に対する全容把握は端緒についたばかりである。調査区に隣接して鉄滓の出土を確認しているなど、縄文時代・弥生時代を含め今後の調査に期待したい。

(小川　和博)

注１　佐々木義則氏のご教示

参考文献

赤井博之・佐々木義則2006「茨城県における須恵器の流通-供膳器を中心とした須恵器の肉眼観察による産地同定と今後の課題-」『婆良岐考古』第28号婆良岐考古同人会

石野　博信　1990「日本原始・古代住居の研究」吉川弘文館

樫村宣行・浅井哲也1992「常陸地域の鬼高式土器」考古学ジャーナル342号

樫村宣行1993「茨城県南部における鬼高式土器について」研究ノート２号(財)茨城県教育財団

川井正一他2002「麻生町史　通史編」麻生町史編さん委員会

高野節夫2000「木工台遺跡における古墳時代後期の土器様相」研究ノート９号(財)茨城県教育財団

土井義夫・渋江芳浩1987「平安時代の居住形態」『物質文化49』物質文化研究会

吹野冨美夫1994「八幡前遺跡における古墳時代後期の土器様相」研究ノート４号(財)茨城県教育財団

茂木雅博他1997「麻生町の遺跡」茨城大学人文学部考古学研究室・麻生町教育委員会

安田竜太郎他1982『食膳形態土器の構成』『平城宮発掘調査報告』ＸⅠ奈良国立文化財研究所

付章　上ノ塙遺跡竪穴建物跡出土土器観察表

遺構番号	挿図番号 第 図	器種	法量(cm)(復元値) 口径	器高	底径	整形・調整	胎土	焼成	色調	遺存度	備考
SI02	13 - 1	須恵器 高台付坏	-	(1.8)	11.8	底部回転ヘラケズリ。高台貼付け。	石英・長石	良好	灰白色	底部1/6残	
	13 - 2	須恵器 蓋	(10.0)	(1.5)	-	天井部回転ヘラケズリ。ツマミ貼付け。	石英・長石	良好	灰色	天井部のみ残存	
	13 - 3	須恵器 蓋	17.0	(2.5)	-	天井部回転ヘラケズリ。	黒色粒子・石英・長石	良好	灰白色	天井部破片	
SI03	16 - 1	土師器 甕	23.0	(9.3)	-	口縁部横ナデ。体部ヘラケズリ。	雲母・石英・長石	良好	黄橙色	口縁部1/8残	
	16 - 2	須恵器 坏	-	(1.8)	7.8	ロクロ成形。底部手持ちヘラケズリ。	雲母・石英・長石	良好	灰白色	底部のみ残存	
	16 - 3	土師器 蓋	17.0	3.2	ツマミ3.8	天井部回転ヘラケズリ。	石英・長石	良好	にぶい黄橙色	1/2残存	
	16 - 4	土師器 蓋	17.0	3.3	ツマミ3.6	天井部回転ヘラケズリ。	石英・長石	良好	にぶい橙色	口縁1/4残、天井部残存	
SI04	18 - 1	土師器 坏	-	(1.6)	5.8	ロクロ成形。底部回転糸切り。	黒色粒子・石英・長石	良好	明赤褐色	底部1/6残	
SI05	21 - 1	土師器 高台付坏	14.8	(5.5)	-	ロクロ成形。内面ヘラミガキの後、黒色処理。	チャート・石英・長石	良好	橙色	体部1/2残	黒色処理
	21 - 2	土師器 高台付坏	16.0	(4.3)	-	ロクロ成形。	黒色粒子・石英・長石	良好	橙色	体部1/6遺残	
	21 - 3	土師器 高台付坏	-	(2.0)	7.4	ロクロ成形。底部回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキ。	雲母・石英・長石	良好	明赤褐色	底部残存	
	21 - 4	土師器 高台付塊	-	(4.0)	6.8	外面ヘラケズリ。内面ヘラミガキ。	海綿骨針・石英・長石	良好	橙色	底部1/2残	
	21 - 5	土師器 足高高台塊	-	(3.3)	7.8	ロクロ成形。	黒色粒子・石英・長石	良好	赤褐色	底部のみ残存	
	21 - 6	土師器 甕	18.0	(5.2)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	石英・長石	良好	にぶい黄橙色	口縁1/5残存	
	21 - 7	土師器 甕	-	(2.8)	10.8	外面ヘラケズリ。底部ヘラケズリ。	チャート・石英・長石	良好	黒褐色	底部残存	
SI06	24 - 1	土師器 坏	14.0	(3.0)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	橙色	口縁1/6残	赤彩
	24 - 2	土師器 高坏	-	(2.1)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	橙色	体部1/4残	赤彩
	24 - 3	土師器 塊	19.0	(4.2)	-	外面ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。	黒色粒子・石英・長石	良好	にぶい褐色	口縁1/8残	
	24 - 4	土師器 高坏	16.0	(3.7)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヘラミガキ。	黒色粒子・石英・長石	良好	明赤褐色	口縁1/4残	赤彩
	24 - 5	土師器 高坏	-	(5.5)	10.4	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	チャート・石英・長石	良好	明赤褐色	脚部2/3残	
	24 - 6	土師器 高坏	-	(4.6)	-	外面ヘラケズリ。	黒色粒子・石英・長石	良好	にぶい黄橙色	脚部破片	
	24 - 7	土師器 鉢	16.0	(5.3)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	石英・長石	良好	暗褐色	口縁1/8残	
	24 - 8	土師器 坩	-	(2.8)	6.2	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	明褐色	底部1/6残	
	24 - 9	土師器 甕	-	(3.5)	7.6	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	明赤褐色	底部1/2残	
	24 - 10	土師器 甕	-	(2.2)	7.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	石英・長石	良好	明赤褐色	底部残存	
	24 - 11	土師器 甕	11.0	10.5	6.0	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	にぶい黄褐色	底部2/3残	
	24 - 12	土師器 鉢	17.2	10.0	7.0	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラケズリ。	黒色粒子・石英・長石	良好	明赤褐色	口縁1/4、底部1/4残	
	24 - 13	土師器 甕	12.2	15.6	6.4	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラケズリ。	石英・長石	良好	明赤褐色	口縁1/2欠損	赤彩
	24 - 14	土師器 甕	18.8	(5.1)	-	外面ヨコナデ。内面ヨコナデ。	石英・長石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/6残	
	24 - 15	土師器 甕	-	(4.0)	7.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	にぶい黄褐色	底部1/4残	
SI07	26 - 1	須恵器 甕	-	-	-	外面平行タタキ。内面青海波紋。	黒色粒子・石英・長石	良好	灰白色	胴部破片	
SI08	29 - 1	土師器 甕	13.8	(4.2)	-	外面ヨコナデ、ヘラナデ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	明赤褐色	口縁1/4残	赤彩
	29 - 2	土師器 甕	-	(2.6)	6.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	暗赤褐色	底部1/3残	
	29 - 3	土師器 甕	-	(3.0)	6.8	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	浅黄橙色	底部残存	
	29 - 4	須恵器 坏	16.0	(3.9)	-	ロクロ成形。	石英・長石	良好	灰色	口縁1/8残	
	29 - 5	須恵器 坏	-	(1.3)	7.6	底部回転ヘラケズリ。	石英・長石	良好	灰白色	底部1/4残	
	29 - 6	須恵器 坏	-	(1.3)	7.0	底部回転ヘラケズリ。	石英・長石	良好	褐灰色	底部残存	ヘラ記号
	29 - 7	須恵器 蓋	11.0	3.0	ツマミ3.0	天井部回転ヘラケズリ。	黒色粒子・石英・長石	良好	褐灰色	ほぼ完存品	
	29 - 8	須恵器 蓋	15.0	(2.2)	-	天井部回転ヘラケズリ。	黒色粒子・石英・長石	良好	灰色	口縁1/9残	
	29 - 9	須恵器 蓋	15.0	(1.8)	-	天井部回転ヘラケズリ。	雲母・石英・長石	良好	浅黄色	口縁1/8残	
	29 - 10	須恵器 長頸瓶	-	(8.4)	7.8	外面回転ヘラケズリ。	黒色粒子・石英・長石	良好	黄灰色	体部1/4残	自然釉、スス付着
SI09	32 - 1	土師器 坏	13.8	(3.7)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヘラミガキ。	黒色粒子・石英・長石	良好	橙色	体部1/8残	赤彩
	32 - 2	土師器 坏	12.9	(4.8)	-	外面ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。	黒色粒子・石英・長石	良好	浅橙色	体部1/6残	赤彩
	32 - 3	土師器 坏	9.8	(4.9)	-	外面ヨコナデ、ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。	雲母・石英・長石	良好	橙色	体部1/8残	赤彩
	32 - 4	土師器 高坏	15.0	(4.8)	-	外面ヘラミガキ、ヘラケズリ。内面ヘラミガキ。	雲母・石英・長石	良好	橙色	坏部1/4残	赤彩
	32 - 5	土師器 高坏	-	(7.2)	12.0	外面ヘラケズリ。坏部ヘラミガキ。	黒色粒子・石英・長石	良好	赤色	脚部残存	赤彩
	32 - 6	土師器 坩	11.0	(6.9)	-	外面ヨコナデ、ヘラナデ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	橙色	体部1/4残	赤彩
	32 - 7	土師器 鉢	16.0	(5.7)	-	外面ヨコナデ、ヘラナデ。内面ヘラミガキ。	黒色粒子・石英・長石	良好	にぶい橙色	口縁部1/7残	赤彩
	32 - 8	土師器 鉢	19.0	(7.5)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	石英・長石	良好	赤色	体部1/5残	赤彩
	32 - 9	土師器 塊	-	(6.7)	5.4	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	赤褐色	底部残存	赤彩
	32 - 10	土師器 坩	16.0	(2.7)	-	外面ヨコナデ。内面ヘラミガキ。	黒色粒子・石英・長石	良好	橙色	口縁1/10残	赤彩
	32 - 11	土師器 甕	-	(2.8)	6.8	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	橙色	底部1/2残	底部木葉痕
	32 - 12	土師器 甕	-	(1.3)	7.2	内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	橙色	底部残存	底部木葉痕
	32 - 13	土師器 甕	-	(4.0)	7.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	浅黄橙色	底部1/2残	
SI10	34 - 1	土師器 坏	14.0	4.4	6.5	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヘラケズリ、ヘラミガキ。	黒色粒子・石英・長石	良好	淡黄色	体部1/3残	
	34 - 2	土師器 塊	19.0	(5.5)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヘラナデ、スジヘラミガキ。	黒色粒子・石英・長石	良好	赤橙色	口縁部1/6残	
	34 - 3	須恵器 蓋	11.0	(2.3)	-	ロクロ成形。天井部回転ヘラケズリ。	チャート・石英・長石	良好	灰白色	天井部のみ残存	
	34 - 4	須恵器 蓋	16.0	(2.9)	-	天井部回転ヘラケズリ。	黒色粒子・石英・長石	良好	灰白色	天井部1/8残	
SI11	37 - 1	土師器 坏	15.2	5.9	3.0	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	明赤褐色	口縁・底部一部残	赤彩
	37 - 2	土師器 坏	13.2	5.1	4.2	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	にぶい黄褐色	口縁1/2、底部残存	赤彩
	37 - 3	土師器 坏	11.0	6.5	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヘラナデ、黒色処理。	石英・長石	良好	暗赤褐色	口縁1/4欠損	黒色処理
	37 - 4	土師器 鉢	14.4	5.7	6.0	外面ヨコナデ、ヘラナデ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	石英・長石	良好	浅黄橙色	口縁2/3残、底部残	赤彩、底部木葉痕
	37 - 5	土師器 甕	21.8	(7.7)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	褐色	口縁残存	
	37 - 6	土師器 甕	16.4	21.0	8.6	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	黒褐色	口縁1/2、底部残存	底部木葉痕
	37 - 7	土師器 甕	16.4	22.3	8.0	外面ヨコナデ、ヘラナデ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	明赤褐色	口縁2/3残、底部残	
	37 - 8	土師器 甕	-	(17.7)	6.0	外面筋ヘラナデ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	にぶい黄橙色	体部1/4、底部3/4残	
SI13	41 - 1	土師器 坏	19.6	(6.7)	-	外面ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。	黒色粒子・石英・長石	良好	にぶい赤褐色	口縁部1/2残	
	41 - 2	土師器 坏	-	(3.4)	5.0	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	橙色	体部2/3残	赤彩
	41 - 3	土師器 坏	12.4	(3.3)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	橙色	1/3残存	
	41 - 4	土師器 坏	14.4	(4.2)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	にぶい橙色	1/2残存	赤彩
	41 - 5	土師器 坏	14.8	(4.1)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	石英・長石	良好	黒褐色	体部1/6残	
	41 -	土師器 坏	15.0	(3.8)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヘラミガキ。	黒色粒子・石英・長石	良好	橙色	体部1/6残	赤彩
	41 - 7	土師器 坏	17.4	(3.3)	-	外面ヘラナデ、ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	橙色	口縁1/8残	赤彩
	41 - 8	土師器 甕	10.0	(9.6)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	にぶい赤褐色	口縁1/6残	赤彩
	41 - 9	土師器 甕	-	(1.9)	8.4	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	黄橙色	底部残存	赤彩
	41 - 10	土師器 甕	-	(2.1)	7.9	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	明赤褐色	底部残存	
SI14	44 - 1	土師器 短頸壺	10.0	6.4	5.0	外面ヨコナデ、ヘラナデ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	暗赤色	口縁3/4欠損	赤彩
	44 - 2	土師器 短頸壺	8.4	6.2	4.4	外面ヨコナデ、ヘラナデ。内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	暗赤褐色	口縁1/2、底部残存	赤彩
	44 - 3	土師器 甕	13.2	15.5	5.4	外面ヘラミガキ、ヘラケズリ。内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	橙色	口縁1/4欠損	赤彩

遺構番号	掲載番号	器種	法量(mm)(最大値) 口径	器高	底径	整形・調整	胎土	焼成	色調	遺存度	備考
S15	46－1	土師器 坏	13.0	4.3	3.2	外面ヨコナデ、ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	黒褐色	1/3残存	
	46－2	土師器 坏	12.2	3.7	3.1	外面ヨコナデ、ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	橙色	体部完存品	赤彩
	46－3	土師器 甕	-	(13.7)	7.4	外面ヨコナデ、ヘラケズリ、内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	浅黄橙色	口縁欠損	赤彩
	46－4	土師器 甕	28.8	21.3	7.0	外面ヨコナデ、ヘラケズリ、内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	明赤褐色	口縁3/4欠損	
	46－5	土師器 甕	26.2	(11.3)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ、内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	橙色	口縁1/4残	
S16	49－1	土師器 高坏	15.4	10.5	-	外面外面ヨコナデ、ヘラケズリ、脚部ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	褐色	口縁1/2欠損、短部欠損	赤彩
	49－2	土師器 甕	16.6	(11.7)	-	外面ヨコナデ、ヘラナデ、内面ヨコナデ、ヘラナデ。	石英・長石	良好	橙色	口縁残存	赤彩
	49－3	土師器 甕	15.2	(10.1)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ、内面ヨコナデ、ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	浅黄橙色	口縁1/2残存	
S17	51－1	土師器 坏	17.0	(3.8)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ、内面ヨコナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	浅橙色	体部1/5残	
	51－2	土師器 坏	13.0	(4.0)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	淡橙色	体部1/5残	
	51－3	土師器 坏	-	(1.0)	-	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、黒色処理。	スコリア・石英・長石	良好	黒褐色	底部のみ残存	転用硬石、黒色処理
	51－4	土師器 甕	17.0	(17.0)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ、内面ヨコナデ、ヘラナデ。	石英・長石	良好	橙色	体部1/2残	
	51－5	土師器 甕	13.0	(6.6)	-	外面ヨコナデ、ヘラケズリ、内面ヨコナデ、ヘラケズリ。	石英・長石	良好	橙色	口縁部1/6残	赤彩
	51－6	土師器 甕	-	(5.0)	8.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	黒色粒子・石英・長石	良好	明赤褐色	底部のみ残存	
	51－7	土師器 甕	-	(2.0)	8.2	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	石英・長石	良好	赤褐色	底部のみ残存	
	51－8	土師器 甕	-	(2.0)	6.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	石英・長石	良好	浅赤橙色	底部のみ残存	
SK07	53－1	土師器 坏	-	(3.3)	3.4	外面ヘラミガキ、ヘラケズリ、内面ヘラミガキ。	海綿骨針・石英・長石	良好	にぶい黄橙色	底部1/4残	

写真図版

1．遺跡遠景（南から）

2．遺跡遠景（南から）

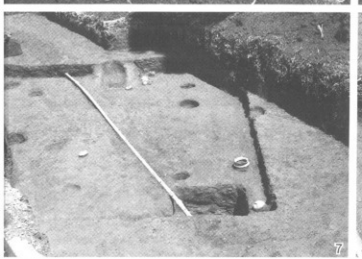
3．遺跡近景（西から）

1．調査区(第１次)全景（東から）
2．調査区(第１次)全景（西から）
3．調査区(第１次)全景（西から）
4．調査区(第１次)全景（北西から）

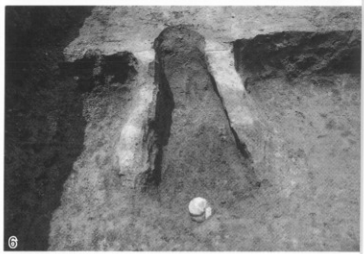
1．調査前(第２次)近景（西から）
2．調査前(第２次)近景（北西から）
3．調査区(第２次)全景（北西から）
4．調査区(第２次)全景（北西から）

1. 調査区(第２次)全景（西から）
2. 調査区(第２次)全景（北西から）
3. 調査区(第２次)全景（西から）
4. 調査区(第２次)全景（南西から）
5. 調査区(第２次)全景（南西から）

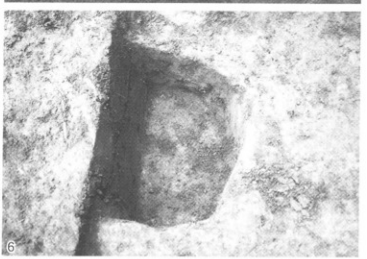
1．SI01（西から）　2．SI02（南から）　3．SI02カマド（南から）　4．SI03（第１次）（南から）
5．SI03（第２次）（南から）　6．SI04（東から）　7．SI05・07（第１次）（西から）　8．SI05・07（第２次）（東から）

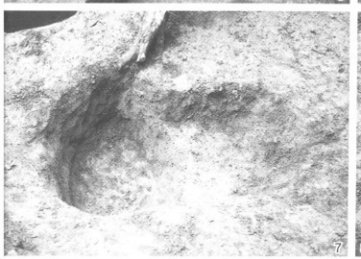


1．SI05（南から）　2．SI06遺物出土状況（南から）　3．SI08（南から）　4．SI08（南から）
5．SI08・09（南から）　6．SI10（南から）　7．SI11（南から）　8．SI11カマド（南から）

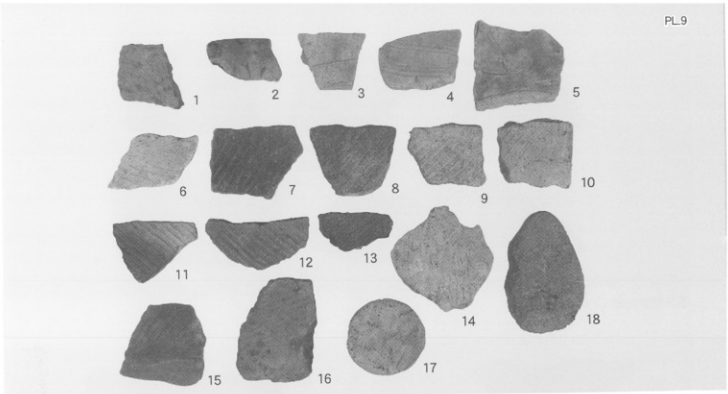


1．SI12（南東から）　2．SI13（南から）　3．SI13カマド（南から）　4．SI14（北東から）
5．SI14遺物出土状況（南から）　6．SI14カマド（北東から）　7．SI15（北西から）　8．SI15貯蔵穴（南西から）

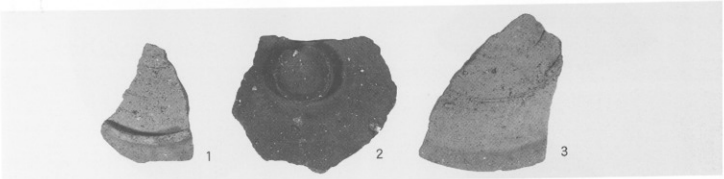




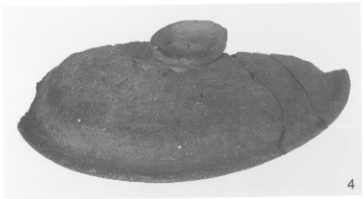
1．SI16（南東から）　2．SI16（北から）　3．SI17（南西から）　4．SI17遺物出土状況（北西から）
5．SB01（南から）　6．SK01（南から）　7．SK02（北から）　8．SK04（南から）

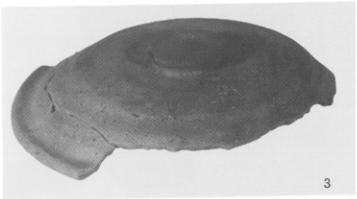


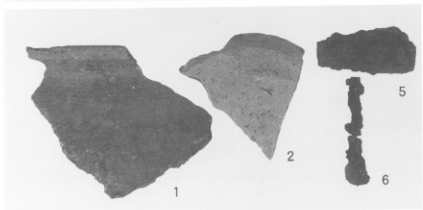
1．調査区出土縄文土器・弥生土器・石器（1～18）



2．竪穴建物SI02（1～3）



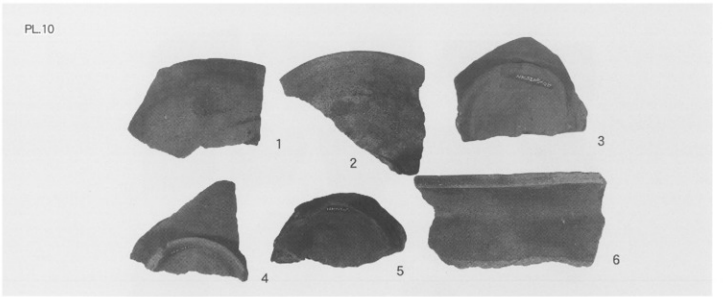




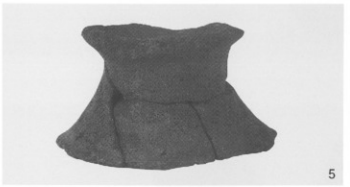
3．竪穴建物SI03（1～6）

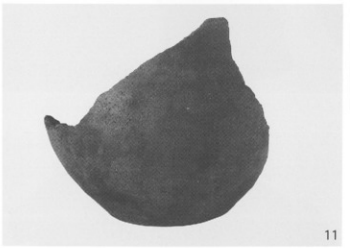
4．竪穴建物SI04（1）

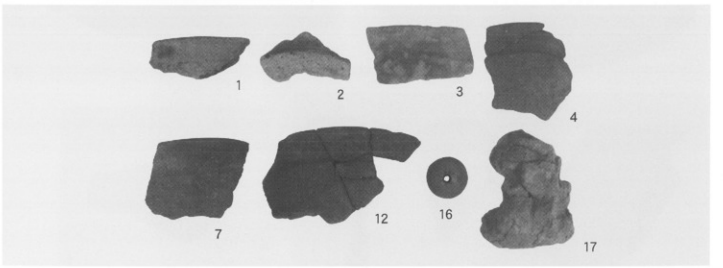
PL.10



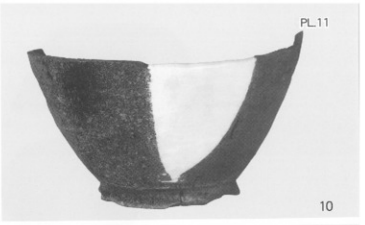
1．竪穴建物SI05（1～6）

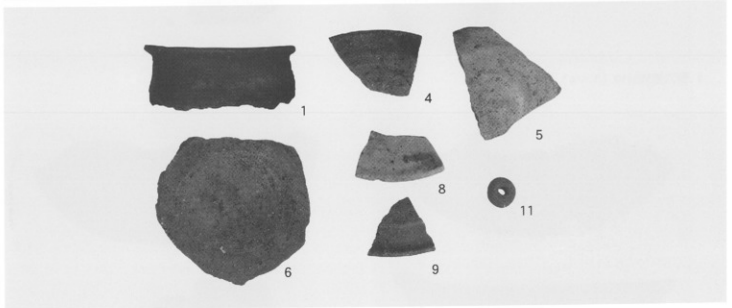




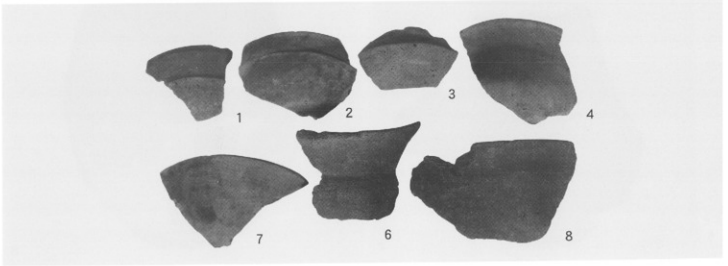


2．竪穴建物SI06（1～5・7・11～13・16・17）



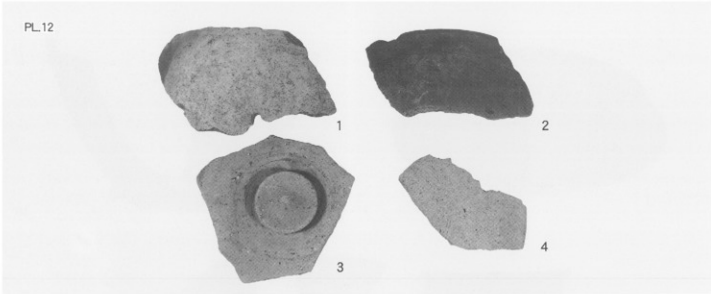


1. 竪穴建物SI08（1・4～11）

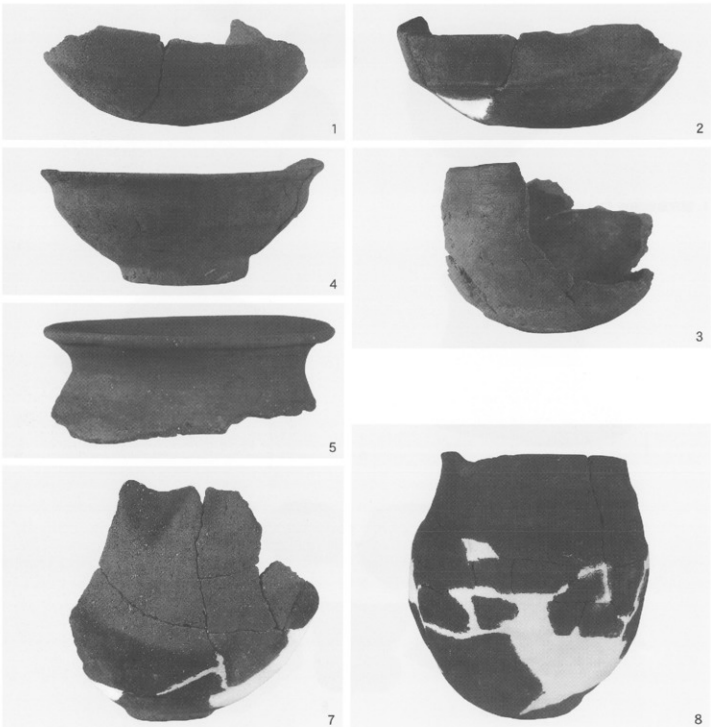


2. 竪穴建物SI09（1～9）

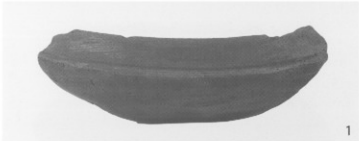
PL.12

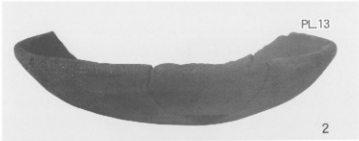


1．竪穴建物SI10（1～4）

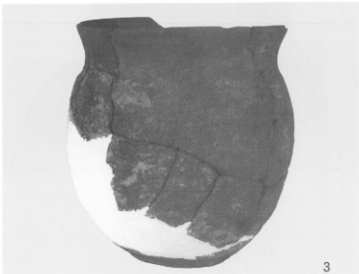


1．竪穴建物SI11（1～5・7・8）

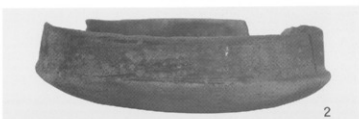


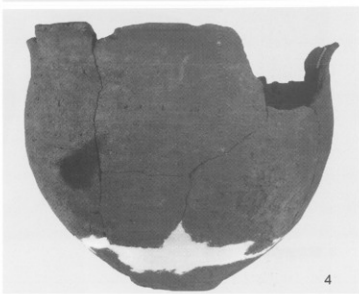


1．竪穴建物SI13（1～4）

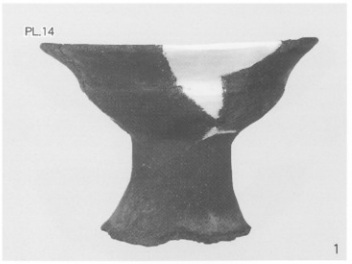


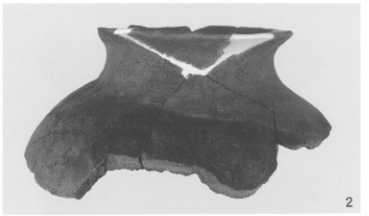
2．竪穴建物SI14（1～3）

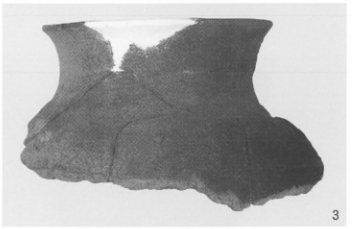




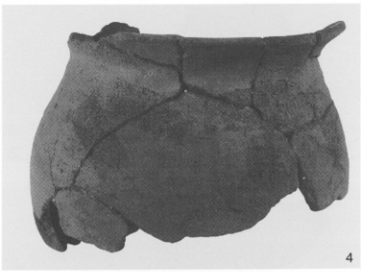
3．竪穴建物SI15（1～4）

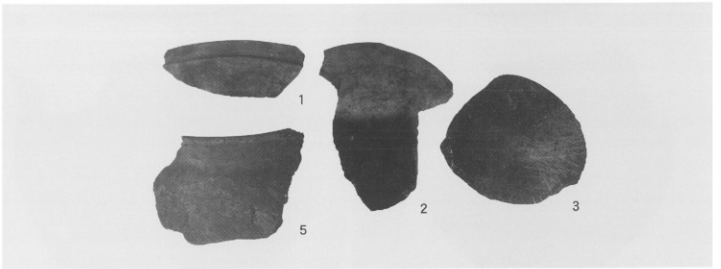






1．竪穴建物SI16（1～3）





2．竪穴建物SI17（1～5）

報告書抄録

ふりがな	かみのはなわいせき　はっくつちょうさほうこくしょ
書　名	上ノ塙遺跡　発掘調査報告書
副書名	
巻　次	
編著者名	小川和博　大渕淳志　遠藤啓子
編集機関	有限会社 日考研茨城
所在地	〒300－0508　茨城県稲敷市佐倉3321－1　　TEL.029－892－1112
発行機関	行方市教育委員会
所在地	〒311－1704　茨城県行方市山田2175　　TEL.0291－35－2908
発行年月日	2012年3月16日

収録遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
上ノ塙遺跡（かみのはないせき）	茨城県行方市（いばらきけんなめかたし） 杉平字上ノ塙82外（すぎひらあざかみのはないかい）	421	234	36度 02分 40秒 14	140度 30分 36秒 0	20100208 ～ 20100331 20100517 ～ 20100714	300㎡ 380㎡	道路建設に伴う記録保存の為の調査

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上ノ塙遺跡	集落跡	縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代	竪穴建物跡　17軒 掘立柱建物跡　1棟 土坑　8基 柱穴状遺構　8基	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄製品・土製品（球状土垂）	古墳時代後期および奈良時代初期の集落跡である。

要約

縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡である。縄文時代および弥生時代は遺物のみ出土であったが、弥生時代では中期・足洗２式土器が出土している。また古墳時代では竪穴建物跡８軒検出され、６世紀中葉から後葉のまとまった遺物が出土している。竪穴建物跡はいずれも方形を呈し、カマドをもち、４本主柱に、梯子柱1本が付し、貯蔵穴が設置されている。また奈良時代では８世紀前葉の竪穴建物跡が4軒確認された。出土遺物では須恵器・坏蓋が各建物跡から出土しており、良好な資料になるものと思われる。
また平安時代後期の竪穴建物跡が２軒検出されている。調査対象地が道路幅という制限された範囲であったが、当地域の古代を考える上で貴重な資料の提供となった。

行方市上ノ塙遺跡
発掘調査報告書

発行日　平成24年（2012）3月16日

編　集　有限会社 日考研茨城
茨城県稲敷市佐倉3321－1

発　行　行方市教育委員会
茨城県行方市山田2175
TEL 0291－35－2908

印　刷　有限会社 田辺印刷
千葉県いすみ市苅谷663－4